

---

# あたしのはなしをきいてくれるの？（仮題）

朋次郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あたしのはなしをきいてくれるの？（仮題）

### 【Nコード】

N6707Q

### 【作者名】

朋次郎

### 【あらすじ】

子供が殺されたり殺人事件にかかわる話がお嫌いな方は読まない  
てください。（すみません）

## 第1話

きょうは4月18日の月曜日です。あたしは学校へ行くのはひさしぶりでした。今日の朝の天気よほうははれ、でした。けどあたしが学校へ行くしたくをしてランドセルをせおうとまだ頭がふらしました。でもあたしのママは、こういいました。

「あんたはもう3年生になったのよ。始業式に力ぜんかひいちゃって、10日間も休んだのよ。ちよつと勉強がおくれたけど、大丈夫よねえ。加絵ちゃん。あんたならすぐおくれを取り戻すでしょ」  
なので、あたしはまだちよつとほんやりしていたけれど「もう元気になったから、だいじょうぶ！へいき！」と言いました。

するとママは「クラス替えがあつたみたいだから、今日は早めに学校へ行つて職員室へ行きなさい」と言いました。

クラス替えと聞いてちよつとイヤでした。前のクラスでは仲良しの子がいたし、担任の詠子先生が大好きだったので、持ちあがりの方がよかつたのです。

ママは続けて言いました。

「よつちゃんとしぎちゃんはよく遊んでくれたみたいけど、3年からクラスは別になつたの。この間電話をくれてそう教えてもらつたわよ」

「ママ、誰が電話をくれたの」

「よつちゃんよ。加絵ちゃんのお熱が高かつたのでママが出たの」

「言ってくれたら電話にでたのにー、ママつたら」

「なにいつてるの。朝っぱらから怒らないの」

あたしはがつかりして玄関のドアを閉めた。よつちゃんとしぎちゃんがあたしと別々のクラスになつたなんて知らなかつた。やさしい詠子先生ともお別れだなんて。1年生から持ちあがりてこれか

らも一緒になれたらいいのに、と思っていたのがっかり。

玄関のドアを閉じて細い路地を歩いて大通りをめざす。とぼとぼ歩いているとうしろからポンポンと肩をたたかれた。ママだった。

「ちよつと加絵ちゃん、さつきからママがよんでいたのに返事くらいしなさい！おいかけてきたのだからね！さあ、見舞いの電話を取り次がなかったくらいで怒られないのよ。はい忘れ物。新しい担任の先生からきのうの夜電話があったの。月曜日からリコーダーをもたせてくださいって」

あたしはリコーダーを受け取った。音楽の時間って2年の時は金曜日だったのに、3年生になったら月曜日になるんだなあ。

それからほつとしてママの顔を見上げた。

「ママ、新しい先生ってだれ？どんな先生？」

「ああ、男の先生になったのよ。塚本って名乗っていらしたわ」

「詠子先生じゃないといやだ」

「なんてことをいうのです。詠子先生なんかもう結婚していらつしやるし、いつ妊娠して産休をとるかかわからない先生が担任になるよ、男の先生の方がいいにきまっています」

ママはすつくと立ってあたしを見下ろしながらそう言います。ママは高いところからあたしの目をじっと見てモノを言う。こういうときのママはこわいのだ。あたしは目をふせる。ママはあたしの肩に手をおいてくるりと学校の方角へからだを向かせると「さ、元気でいっておいで。ママもすぐしたくして出勤しなくちゃね」

あたしは早足で歩く。急にママの「ほほほ！」という高笑いがかいてこえてびっくりして振り向くと、近所のおばあさんがいつのまにかいて2人してこつちを見ている。

「なにしているの、早く行きなさい。おくれるわよ」

ママが大きい声であたしに言った。おばあさんが何か言った。聞こえない。するとママが「いえいえ、3年生になったといつてもまだほんとに赤ちゃんです。」とか言っている。

ママの声は甲高くて大きい。あたしは恥ずかしくなって走り出した。2人がまだこつちを見ているようで大通りの横断歩道を渡りきるまで絶対に振り向かなかつた。渡りきつとあとにちよつと歩いてかどっこを曲がるともう学校がみえてくる。

学校が見えてきたらほつとしてゆつくり歩く。ママはいつでもいそがしい。あたしにはパパがいないのでママはひとりであたしを育てている。ママはエライ人なのだ。ママはあたしが病気をしてからよく怒るようになった。多分あたしが悪い子だから・・・どうせ病気になるなら春休み中になつたらいいのに、始業式の前の日から熱を出しちゃつて。何回要領の悪い子だといわれたらう。

あたしの熱がなかなか下がらなかつたのでママは仕事を休まないといけなかつた。寝ている間、ママが仕事先の人と電話をしている。ママは何度も子供が熱をだしまして、ごめいわくをかけてすみませんとあやまっていた。

ママの声は大きいのでよく聞こえた。ママの仕事のジヤマをする悪い子、始業式の前の日に熱をだす要領の悪い子。

だから詠子先生や、よつちゃん、しぎちゃんと別れてしまったんだ。新しい塚本先生ってどんな先生だろう。詠子先生がいいのにな。そう考えながら歩いていると後ろからわつと抱きついてきた子がいた。ふりかえるとよつちゃんだった。

「加絵ちゃん、元気になつたね。よかつたね。さつきから呼んでいるのに、考えごとでもしてたの？」

「よつちゃん！電話くれたのね、ありがと」

よつちゃんはううん、と首をふつた。

「でもクラス別になつちやつたね」

よつちゃんは詠子先生と持ちあがりだった。いいなあ。

「詠子先生と同じでよかつたと思う。でもしぎちゃんは1組だしあたしは2組、加絵ちゃんは3組。あたし達3人ともばらばらになつたね」

しぎちゃんまで別のクラスだなんてショック。もつと聞いてみたら他の仲の良い子も別々になっていた。あたしは悲しかった。

2年の時はいいクラスだったのに。他のクラスではいじめがあったとか聞いていたので詠子先生のクラスのままでいいと思ったのに校内に入りよつちゃんは「じゃあね」といつて3年生用のシューズボックスにくつを入れに行く。しぎちゃんも通りすがりにあたしに気付いて手を振ってくれた。

「加絵ちゃん、やっと学校に出てこれたんだ。お花どうだった、きれいだっただでしょ」

「お花？」

「お見舞いのお花だよ。始業式の帰りによつたの。お花は川の堤防までつみにいったのに。あれ、あんたのママにわたしておいたでしょう」

「ごめんね・・知らなかった。しぎちゃんは家まで見舞いにきてくれたんだ」

「あのときあんたのママは電話しながら出てきたの。お花だけうけとつて加絵ちゃんに会うのはよそうねえ、まだお熱があるしうつたらいやでしょうって」

「ママったら、言ってくれたらよかったのに。ごめんねごめんね。しぎちゃんごめんね。せっかく来てくれたのに」

しぎちゃんはにっこりと笑った。

「いいのよ。じゃあクラス別になつたし、こっちへ行くね」

と、あたしの知らない女の子におはよう、と声をかけて階段を上つて行った。あたしはだんだんと人がふえ、うるさくなっていくシューズボックスでしばらくぼんやりとしていた。

あたしの知っている子がにこにこ笑っていった。あたしも笑ったが不安だった。知っている子はみんな、あたしの知らない新しいクラスメートであるう子と歩いていったから。

あたしがいつも仲良くしていたのはよつちゃんとしぎちゃんだけだった。詠子先生からも時々「あんた達、いつも3人1組だけどた

まには他の子とも仲良くしなきゃあ」といつていたことを思い出す。  
詠子先生もいそがしい先生だから、おとなしかったあたし達よりももっと手のかかる、いたずらばかりする内田ワタル君や養護のアキラ君の方もかかりきりだった。

あたしは土足のまま、とぼとぼとみんなの行く方向と逆の方向を歩いて職員室の方へ向かった……。

## 第2話

職員室に入るのは1カ月に1回か2回まわってくる日直の日の朝、日直日誌を取りに行くときぐらいだったので気が重かった。引き戸を開ける。先生達のどっしりとした大きなつくえが見える。手前のつくえには本やプリントが山積みになっていたので奥にいる先生達が見えない。ママがこのつくえを見たら「きちんとそうじしなさい」とおこるぞ、と思いつつ詠子先生をさがした。詠子先生は一番奥の窓際につくえにいて隣の男の先生としゃべっていた。あたしはそのまま、つくえの間を通過して詠子先生のところへ行きたかったが、手前には太田先生がすわって何かを書いていたのでやめた。

太田先生はすぐ生徒をなぐるのでこわいのだ。もちろん加絵はなぐられたことなんか一度もないが、以前何かの時に廊下を飛び出したわたるくんを殴ったのを見たことがある。授業中だったのでわたるくんが教室にいる時間なものもし廊下を飛び出したらその日の日直が連れ戻すことになっている。あれは2年生のときだった。自分が日直のときにわたるくんがいきなり廊下を飛び出して行った。加絵もあわてて席をたつて追いかける。連れ戻されまいとするわたるくんをなかなかつかまえられず説得もできず、半泣きで追いかけていた。体育館の裏あたりでおきなり太田先生がぬつとあらわれてわたるくんを頭をなぐったのだ。「外に出るな、もどれ」といいながら3回もなぐった。わたるくんはすぐにおとなしくなって、両手で自分の頭をおさえて加絵のところまで後ずさりした。太田先生は加絵にはめもくれず、さっさとどこかへ行ってしまった。

今も太田先生は加絵がそばにいるのに気がつくはずなのに、知らん顔で何かを書いている。加絵はしかたなしに太田先生の背中越しに詠子先生が早く自分に気がついてくれるように凝視しながらじつと立っていた。やがて太田先生がちつと舌打ちして加絵の方にいす

がぐるりとまわして「何だ」と聞く。

加絵はどきまぎしながら「詠子先生・・・」と小声でつぶやいた。

「何だ。ちゃんと最後まではつきりいいなさい」

太田先生は声大きい。詠子先生がやっとこちらに気づいてくれた。

「まあ、桜田さん。やっと出てこれたのね。もう大丈夫なの」

と声をかけてくれた。とたんに加絵は元気ついて先生のところへかけよっていった。

「詠子先生ではなくてだな、田中先生だろ！」

太田先生の声が背後で聞こえたが構わなかった。

「いいのよ、クラスに田中さんが2人もいたもんね。だから名前を読んでくれるようになったもんね」

詠子先生はそう言ってくれた。やっぱり詠子先生はいい。この先生が大好きだ。詠子先生は1年や2年生のときと同じように笑顔で加絵の顔をのぞきこんだ。

「3年生になったわね。今度は別のクラスになっちゃったけど、がんばるのよ。先生も応援しているからね」

と言ってくださった。加絵は大きくうなづいた。それから詠子先生は加絵を隣にいた男の先生に引き合わせた。

「塚本先生、桜田加絵さんです。風邪をひいて熱がひどく始業式にも出席できませんでした。今日からよろしくお願いします」

詠子先生としゃべっていた先生がその塚本先生だった。3年生になった加絵にとってはじめて会う男の先生だ。加絵はぺこりとおじぎをした。塚本先生は年をとって見えた。いくつなんだろう。目の周りがしわだらけだなあ、と加絵は思った。やがて塚本先生は立ちあがり「じゃ、君は3組だからね。一緒に行こうか」と言った。

この新しい先生の声はひどく低くてくぐもった声だった。加絵は聞きとりにくいと思った。詠子先生はにこにこして加絵を見ている。塚本先生はさつさと廊下に出たので加絵もあわてて後を追った。加絵にかまわずズンズン先を歩くので足がもつれそうになる。

玄関のシューズボックスのところにはもう誰もいなかった。もうすぐ始業のチャイムがなる。階段を上がろうとすると塚本先生がくるりと振り返り「なんだ、土足で！上履きにはきかえないのか！」とどなった。

加絵はあわててランドセルから上履きを取り出す。履き替えている間も塚本先生は階段をあがっていく。加絵もあわてて土足のくつをもったまま、あわててついて行った。追いついたのは3階につき直前だった。加絵は病み上がりでつらく思ったが必死だった。この先生に置いて行かれるともう学校のクラスにたどりつけないと思ったのだ。3組とカードがぶらさがっているドアの前に立つと塚本先生は加絵が両手で持っている土足の靴をみて「そうか、今日はじめてだったもんな。シューズボックスの位置がわからなかったのか」とひとりごとのようにつぶやいた。

聞き取りにくい声ではあったが加絵はほっとしてうなづいた。「ばかな子だ。そこいらのあいているところにつつこんでいりゃ、よいものを・・・」

加絵は棒立ちになった。先生の語尾ははっきりとは聞こえなかったが、自分をばかな子だといったのは確かだった。両手に持った靴がぶらぶらと大きくゆれた。

それでもこの先生は加絵をクラスのみんなに紹介し、後で休み時間にシューズボックスの自分の場所を指示してくれたので、ほっとした。

加絵の席は一番後ろになっていた。となりの席は豊成さんという髪の毛ながい女の子だった。親切な子で新しい教科書はここまですすんだよと教えてくれた。

1時間目は国語だった。真新しい3年生の教科書を開いているものの、加絵はともすれば頭がぼーっとして、カゼがまだ完全に治っていないと思った。カゼ薬も飲んでできている。この薬を飲むと眠くなることがあるって確かママが言っていたと思う。今までこんなひ

どいカゼをひいたことがなかった。熱がでてこんなにしんどいとは思わなかった。

「桜田！聞こえんのか！」

ふいに頭の上から大きな声がふってきて加絵は仰天した。いつのまにか塚本先生がすぐそばまでやってきていたのだ。

「さあ、続きを読みなさい」

加絵は席を立ったものの、どこから読んでいいのかわからなかった。となりの豊成さんがここ！とある場所を指さしてくれたので、ほっとして読み始めた。

「・・・そうして、その父と子は・・・」

加絵は朗読が得意だったからすらすらと読める。塚本先生はしばらく加絵の横に立って聞いていたが、また黒板に向かって歩いていく。と、急に加絵の方を振り返ったとなった。

「どうした。やめ、ここまで、といったのが聞こえなかったのか？」

加絵はあわてて教科書を下に置いてすわった。いすをひく、ががっ！という音がやけに教室中にひびいた。教室はしーんとしていた。教師はふん、という顔をするとか何かをつぶやくが加絵には聞こえなかった。加絵は恥ずかしくてしばらく顔を上げられなかった。今日がはじめての3年生になった日なのに。まだ名前も知らない子もたくさんいたのに。失敗して恥ずかしい。ずっと本を読みたいと思われたらう。ヘンな子だと思われたらう・・・。

1時間目がようやく終わると加絵は豊成さんにさっきのお礼を言った。豊成さんはにこっとして、ううんいいの、と喋ってくれた。やさしい子がとなりでよかったと思う。加絵はどちらかというと休み時間は外へ出て遊ぶよりも、教室で本を読んだりするのを好む性質だったので2年の時と同じだったクラスメート以外の顔はほとんど知らなかった。2年の時に一緒だった子が加絵の周りに集まった。「あの先生の声、マジ小さいよね、さっきのことなら気にすることないよ」

「ほんとほんと、詠子先生の方がいいよね」

「塚本先生は今月の4月に転勤してきたばかりの先生だよ」

誰かが「国立のきょういくだいつていうのを出ているらしいよ。頭はいいみたい」と言う。またついで誰かが言った。

「でもいい大学出てるからって、教え方がうまいとは限らないよ。あんなじじいだし・・・」

みんなそこでどつと笑った。加絵はさきほどまでであった不安と恥ずかしさが薄らいでいくのを感じた。

「よかった。ここでもなんとかやっていけそうだ。よっちゃんやしぎちゃんがいなくとも、豊成さんもいるし、声かけてくれる子もいるし」

しかし桜田加絵の安心感は長く続かなかった。

### 第3話

あれから1カ月たった。加絵は授業についていけないと感じた。なにより先生の説明がわかりにくいのだ。もそもそとしゃべる先生が嫌だった。

その上なんとなくクラスになじめないままでいる。4月の初めに1週間休んだだけなのに、みんな早くもそれぞれグループを作っていて加絵を入れてくれないのだ。

自分から話しかけるよりも話しかけられるのを待つ性格が災いしたのかもしれない。いじわるをされているわけではないが、疎外感を感じていた。

ある日加絵は自分が話しかける相手が、このごろおとなりの豊成さんだけだと知ってぞつとした。昼休みにしぎちゃんのいる1組や、よっちゃんのいる2組にも行ったが彼女達もそれぞれ新しい友人を得て忙しそうに見えた。行けば歓迎はしてくれるが、それも最初のうちで毎日行くのもだんだんと気が引けてくる。教室をのぞいてよっちゃんやしぎちゃんがそれぞれのクラスメートに囲まれて、輪になって遊んだりしゃべっているのを見て、遠慮して自分のクラスの自分のつくえに戻って、ぼんやりと窓際から見える光景を眺めることが多くなった。

長い昼休みは特に自分だけがぼつんと席に座っているのは苦痛だったので図書室へ行くことが多くなった。図書室は2階の一番すみっこにある。図書室の専門の先生はいない。気楽に入れる。駅前の大きな図書館のことを思えばずっと小さかったが加絵にはこれでじゅうぶんだった。昼休みに行っても誰もいないことが多い。ほぼ加絵の借り切りになることがあってうれしかった。

中央に1つだけ大きなつくえがあり、そこに選んでもってきた本をおいて椅子にちょこんとこしかけると本が加絵をいろいろな世界に連れて行ってくれる。想像の世界が現実になる。加絵は本が大好

きでこの1人だけになれる本の世界が楽しかった。

昼休みは本当に待ち遠しいくらいになった。

他の生徒はほとんどこないと思っていたが利用するうちに内田わたるくんもけっこうくるのがわかって驚いた。わたるくんは1年と2年の時は同じクラスだったが加絵とはしゃべったことがない。なぜなら授業は音楽と体育、図工の時間だけ一緒に、あとはわたるくんだけ別のクラスに行っていたからだ。口の聞けない子なので、加絵とは当然話もしないが、いつも決まった場所に置いてある絵本と音が出る絵本がお気に入り、そればかり見て、そればかり聞いている。

電子音が同じメロディーで繰り返し聞こえてくると、静かな図書室では耳障りだ。わたるくんは毎回そうなのだが加絵は我慢していた。わたるくんはいわゆる普通の子ではないし、いわゆる普通の子はあたしにだって仲良しの子はいない。

本の世界だけがあたしの仲良しなのだ。本さえ開けばあたしはひとりぼっちでもないし、さみしくもないのだ。図書室通いは楽しい。しかし本を読むのに熱中していると、頭と耳がいきなりツーン、と響いて痛むことがある。春にひいたカゼのせいかもしれない。頭痛と耳の痛みが続くと当然授業にも集中できない。先生の声が聞きとれない。加絵は疲れてしまうのだ。それで学校から帰るとつくえにつつぷして寝ることが多くなった。

加絵の母親の麻衣子は帰りが遅い。帰ってきても自分の部屋にもって持ち帰った仕事をしたりする。

その日もママの帰りが遅かった。あたしはママが帰ってくるのを知らずにうたた寝してしまった。ママが怒っている。

「加絵、起きなさい！なんですか、ここは寝るところではないですよ。テレビもつけっぱなしで、それもこんなにボリュームをあげて！外からでも音が聞こえてきて近所迷惑じゃないの！さあ、しっかりしなさい、宿題はしたの！？」

「まだ・・・」

「はーっ。ママは疲れて帰ってきたのに、部屋は散らかっているし、そうじもできないのねあんたは！晩御飯に食べたお皿ぐらいあらったらどう？もう3年生になったのだから、できることはなんでもしないと！」

麻衣子は加絵をどなった。のっそりと起き上がる我が子を苦々しく見つめる。3年生になってからどうもこの子は怠け者になったようだ。2年生までは自分のことは自分でできるようになったし、成績はよいし、やや引つ込み思案な面もあるが、母親の苦労を見ているせいか8才にしては大人びているし。これなら大丈夫と思って、4月から勤務時間を延長してもらったのに、だめだわ、これでは！麻衣子はいらいらしていた。せっかく抜擢されたい仕事をまかせてもらえるようになったのに、空回りしてうまくいかないのだ。4月のはじめに加絵が風邪をひいたためどうしても仕事をやすまざるをえなかったが、それも原因の1つになっている。

加絵は生氣のない顔で「ママ、頭と耳が痛い・・・」と言う。もう夜の10時をまわっている。麻衣子はそっけなく言った。「そりゃあ、痛いでしょうよ。こんな近くでテレビを見てポリウレムを上げて見ていてそのまま寝ていたら痛くもなるわよ。さあ、シヤワーでもあびてさっさと寝るのね！」

頭と耳が何かヘンだと感じる。加絵は困っていた。どういつているのかとにかくヘンなのだ。自分がお風呂やプールでもぐっている感じ。水の中でくぐもって、そこから音を聞いている感じ。

でもママは忙しい。

塚本先生は最初の日から嫌われているように感じる。加絵は無視されている感じをうけていた。加絵は一番後ろの席にいるがこの先生はいつも後ろの席まで歩いてくると必ず加絵ではなく、となりの

豊成さんに話しかける。毎日だ。

ほら！

塚本先生がこちらにくる、きつと豊成さんに話しかける！

話しかけた！

そらね！

あたしの言った通りでしょ！

それから後ろの席から黒板をながめるふりをする。それでつくえの下でアニメの小さい本とか読んでいる男のことか見つけてぐいと耳を引っ張ったり、げんこつで頭をたたいたりする。それからクラスで一番きれいな佐々木さんに「ノート見せてごらん、よく書けているね、よしよし」とか言うのだ・・・。

ほら、言った！

加絵は心の中で断言した。塚本先生は豊成さんと佐々木さんがお気に入りだわ。だってほら見て！2人とも紙が長くて目がぱっちりしてどっかのタレントさんみたいだもんね。

「加絵！この点数は何なの！40点だって、信じられないわ」

ママは加絵を前にして見下ろしている。ママの顔が見れなくてあたしはうつむいている。

「これは何か、と聞いているのです。あなたは漢字テストが得意だったじゃにの、算数もそう！どうやったらこんな簡単な計算問題が間違えられるのよ。ママの帰りが遅くなったのをいいことに、テレビばかり見ているね。ほら、あれほど言い聞かしているのに、またこんなに音を大きくして！うるさいから早く消しなさい、宿題はしたの？まだ？もう、はつきりいいなさい！まだだったら今からでも早くしなさい、ほら、ほら！ぐずぐずしない！」

ママの小言は毎晩際限なく続いた。それはそうだろう。加絵は授業がわからなくなっていた。この漢字テストだって、先生が問題を読み上げてそれを漢字にするというものだった。加絵は塚本先生の

声が聞き取りにくいというのと、いつもかわいい子だけひいきする  
という考えに凝り固まって、授業に身が入らなくなっていた。

「ママは決めました！加絵、あんたは来月から塾にやりますからね  
！一体だれのために私が働いていると思っているの。みんなあんた  
のためですよ！それなのに、こんな低い点数をとってきて平気だ  
なんてどういう性格をしているのかしら！」

加絵はとうとうしくしく泣き出した。学校ではいつも1人だった。  
家でも夜遅くまで1人だ。この上、塾までやらされるなんて。あた  
しはかわいくないからせめて勉強だけでもいい子にならないといけ  
ない・・・さもなければあたしのママまであたしを嫌いになるに違いな  
い・・・。

## 第4話

6月に入って懇談会があった。そこで桜田親子はさんざんな目にあつた。塚本先生はとにかく加絵をこきおろしたのだ。

「まあ、本人はがんばっているとは思うのですが、どうも授業に身が入らないようで時々ぼーっとしていますなあ。呼んでも返事しないことが多いし、となりの子に腕をつつかれてはじめてこちらの顔を見るのですよ。休み時間も本ばかり読んでいて、友達も少ないですよ。引っ込み思案を治さないとこれからも苦労するのではないか・・・、とこちらも心配しております。いえ、頭は悪くはないですよ。集中力さえつけばね」

母親の麻衣子はおとなしく塚本先生の言葉に聞き入っていたが、帰り道を一緒に歩いていて母親の不機嫌さがびんびん伝わってきて加絵はおびえていた。

「あそこまで悪く言われるとは思ひもしなかったわ。加絵には恥をかかせられたわね」

加絵は塚本先生を心底大嫌いだと思った。

「あの先生は指導力があるので、ここの校長先生のたつての願いでよその学校から異動してもらったと聞いていたの。だから私はすこく期待していたのに」

家につくと麻衣子は加絵の前に仁王立ちになってこう宣言した。

「ママの願いはただ1つなの！早くあんたが大きくなって、よい会社就職して、お給料をもらってママを楽にしてほしいの。そのために勉強しなさい、とっているのよ。みんなあんたのためになることなのだから！」

そして加絵にとつてとどめの言葉を言ったのだ。

「これ以上低い点をとつてきたら、もつと塚本先生に嫌われるわよ！さあ、今から勉強しなさい。ママはこれから職場に戻るから！」

い子でいなさいよ」

加絵は麻衣子が出て行ったあとも、声もたてずに涙をこぼしていた。やっぱりあたしは塚本先生に嫌われているんだ。ママにもわかつたんだ。そしてママにもあたしは嫌われつつあるんだ、と思った。

その数日後に月はじめにした健康診断の結果が出て、各児童に虫歯の記録だの、身長、体重グラフだのが渡された。加絵の順番がくると、塚本先生は用紙を渡す前にちよつと手をとめてみんなの前で「君は耳が悪いと出ている。耳鼻科にいきなさいという指示があるからね。私もそうではないかと思っていたんだ。夏休み中に治しておくように」

加絵はぼんやりとして用紙を受け取った。何がおかしかったのか笑う子もいた。加絵はだまっていた。それからだ。本当にシヨックだったことがおきた。

先生はその時用紙を渡す手を一瞬止めました。あたしは思わず、先生の顔を見ました。先生はあたしを軽蔑した顔つきで見えていました。耳が悪いと言われたのよりも、その目つきの方がシヨックだった。いいえ、見間違いなんかじゃない。

あたしははつきりと嫌われているのを自覚したの。用紙が全員に行きわたると、休み時間になりました。あたしはいつものようにつくえの下から本を取り出したの。今読んでいるのは「赤毛のアン」のシリーズです。図書室から借りましたがすごくおもしろくて夢中になって読んでいました。ところがいつのまにかチャイムが鳴っていて、いつのまにか先生が教室に入っていて、いつのまにかあたしの横に立っていたのです。

はつとして先生を見上げると、先生は割れがねのような声であたしをどなりました。

「桜田！何回呼んだら聞こえるんだ！」



けても振り返らないことやテレビの音をやたらと大きくしてしまう理由がつくわねえ。もう仕方がないから耳鼻科に行きましよう。もうすぐ7月になるし夏休みがはじまるし、明日にでも早く診てもらいましよう」

「ママ、明日は塾があるけど・・・」

「耳の方が大事だから塾はやすみなさい。耳鼻科にはしばらく通うかもしれないけれどもう仕方がないわね」

「そうね、ママ」

「まあ、うれしそうな顔をして、この子だったら！塾へ行かなくてもお勉強はかえってからしっかりしなさいよ。これ以上成績が下がったら、許しませんよ」

「はい、ママ」

ママは次の日に早速仕事を早く終わらせてあたしと駅で待ち合わせして夜遅くまで診察してくれるところに連れて行ってくれました。

お医者さんは加絵を後ろ向きにさせると「いいかい、私の言う言葉を繰り返して行ってごらん」と言いました。

背後で何かもそもそという音はしているのがわかったものの、加絵には内容がわからなかった。

「加絵！聞こえないの？りんごって今先生が言ったでしょ！」

「・・・りんご・・・」

麻衣子の声のはりさける。

「そうじゃないって今の言葉は、」

「お母さんはちょっと黙っていてください」

医者に諭されて麻衣子は黙った。

「それじゃこつち向いて、ここに時計があるね。時計がコツチコツチといっているのが聞こえるかい」

加絵は返事をする前に母親の顔を見上げる。母親の顔はすごく怖かった。とても怖い顔をしていた。

「・・・聞こえます」

うそを言っちゃったけれど、ママの顔がやわらいだので安心する。お医者さんはあたしの顔をずっと見ていた。つぎにあたしは診察台に座らされる。

歯医者さんのいすに似ているけれどちょっとちがう。このいすはなにかへんだった。あたしはおとなしく座ったものの、すぐ横にへんな形をした器具や小さなつぼが置いてあるのを見てぞっとした。

お医者さんはあたしの耳の中をのぞいたと思うといきなり冷たい棒のようなものをつっこんだのであたしは思わず身をよじりました。こわいこわい・・・。

「動いてはいかん！」

と言われましたがこわいのです。看護師さんがそばにきてあたしの頭を動かないようにすごい力で抑えました。足をばたばたさせるともう一人別の看護師さんがきてあたしの足を押えました。

お医者さんはあたしの鼻の穴にも長い棒を入れました。すごく痛くてつらかったです。泣き叫んでしまいました。お医者さんが器具をはなして「もうおりていいよ」と言ったので急いでいすから下りました。

「この子は9歳だつて？まるで幼稚園児だな、聞き分けのない子だと、ママに言いました。さっきの時計の音なんか全然聞こえなかったのに、この言葉はよく聞こえました。あたしはこのお医者さんにも嫌われたと思いました。」

看護師さんがあたしの手をとってくれました。見上げると優しい声で「さあ、ちょうりよくけんさしつで、けんさしましょうね」と言いました。

その看護師さんは「ちょうりよくけんさ」は痛くないからね、といつてくれたのでほっとしました。

検査室は別の部屋にあつて、その部屋にはあたし1人だけが入れられました。

大きなイヤホンと小さなイヤホンが取り付けられていて、そこか

ら音が出ます。音はだんだん大きく聞こえてきます。聞こえた時点で手にもたされたボタンを押します。すると音がやみます。高いキーンという音や、ぶ、ぶ、ぶ、という低い音までいろいろ聞きまし  
た。

「お母さん、この子は普通の半分も聞こえていませんよ」

麻衣子は息をのんだ。医師は質問した。

「成績がさがっていませんか、呼びかけても返事しないことがあります  
ませんでしたか」

「・・・そういえばテレビのポリウムをあげて聞くようになったの  
で、変だとは思っていましたが」

「滲出性の中耳炎ですね」

「中耳炎・・・、全然痛がらなかったのですけれど」

「痛くない中耳炎ですよ。高熱を出した後には耳まで熱が移ることが  
あります。液がでていてももうすぐ鼓膜を破って出てきそうですよ」

「それで先生、この子の耳は治りますか」

「今から鼓膜を切開して中の液を吸い出します。ただ発症してだい  
ぶ日が続いているようだし元の聴力になるかはわかりませんよ」

「そんな・・・」

加絵は再び例のイスに乗せられる。無理やり座らせられる。

そして加絵は鼓膜を着られ大きな音をさせて液を吸い取る器具を  
つつこまれ痛みと恐怖に泣き叫ぶことになる。

その様子を見守るママの顔が蒼いのをあたしは泣きながら確認し  
ていました。

「これからしばらく夜診に通わないといけないのね」

ママはため息をついた。

「あんたがもつと早く耳が変だといってくれたらよかったのに！」  
とあたしを怒った。

あたしは耳が悪いと言われても全然自覚がなかったので、あいま

いにうなづいた。

「やっぱりあんたは愚図ね！」

ママはいつまでも小言を言っていたが、それでもハンバーガーを食べさせてくれた。あたしはまだ耳が痛かったが、お腹がすいていたので、おいしく食べた。それから耳鼻科で出た食後の薬を飲んだ。

## 第5話

また次の診察でママがあたしをプールにいれてもよいかとお医者さんに聞きました。お医者さんはしばらくプールに入ってはいいとおっしゃいました。あたしはその言葉を聞いてほっとしました。塾だけでなく、夏休みにある学校の水泳教室も今年には行かなくてもいいでしょう。塚本先生の顔なんか夏休みまで見たくもありませんでした。

塚本先生なんか大嫌いだ。先生があたしを嫌いなら、あたしだって先生を嫌っても悪くない、と思う。ただ顔には出さないだけだ。

あの顔つきを治せという意味の言葉を言われてから、一部の男子から整形しろとかブスと言われるようになったからだ。

あたしがいじめられるようになってからは、となりの豊成さんもあんまり話しかけてくれないようになった。今ここだよ、とかも教えてくれない。学校があるのがおもしろくなくて、あたしは夏休みを心待ちにしていました。

ママには先生から言われた例の言葉は黙っている。言えばどんなに怒るか怖かったのだ。あたしのママは塚本先生よりも怖い。それにママは先生の言葉に腹は立てても、あたしに文句をいうだろうと思うのだ。そう、あたしが愚図だから先生があたしをいじめるのだと。

先生もママも、あたしを子供だと思っているが、子供だって大人のことかわかる。バカにしないでほしい。

今通っている耳鼻科のお医者さんだつてそうだ。前もつて「鼓膜を見るけどちょっと痛いかもしれないよ」とか「鼻の穴にいれる棒がちよつと冷たいかもしれないけど、すぐ終わるから」とか言ってくれたらあたしだつて泣いたりしないのに！

今は加絵はまわりのもの全部に猛烈に腹をたてていた。



結局ママはあたしを病院に連れていくこともありませんでした。なのであたしは夜は前のように家で本を読んでいます。塾へ行くこともありませんでした。一度よっちゃんが花火をしに、外へ出ようと誘いにきてくれましたがママが怒るからダメと断りました。

しぎちゃんとは家が近いのでたまに遊びにきてくれました。ゲームをしているときから話しかけているのに、生返事ばかりしてはだめ、と言われました。

「あたし、耳がわるくなったのよ」  
そういうとしぎちゃんは「そうかあ・・・」と言いました。

久しぶりにピアノをひいてみると自分の耳のことが自分でわかります。和音とか半音の音が春休み前にはその違いがわかっていたのに、今は全然だめでした。

そういうわけで学校から帰っても家でごろごろしていました。夏休みに入ると学校で1日置きに水泳教室があるらしいですが、あたしは切開してもらった鼓膜に傷があるので、参加しなくていいことになっています。でもそれを塚本先生に言ったらその日の晩にママに電話をかけて本当ですか、と確認したようです。

ママが本当です、というところ「診断書」が必要なので持ってきてください、と言ったそうです。あたしのいうことなんか信用していません。あの先生はママに「もし参加できなくとも見学だけでもさせてください」と言ったそうです。ママは診断書をもらいにいくのが面倒でこのいそがしいのに、とぶつぶつ言っていました。

あたしは夏休みに入っても学校なんか行きたくありません。他の人がプールに入っているのをただ見るだけなんかおもしろくともなんとありません。家にずっといたいんです。かといって自分でいいこともないし、学校へ行くなら1日図書室ですごすつもりでいました。

夏休みまであと少し。ママがやっと耳鼻科からもらってきた診断書を塚本先生に渡しました。すると先生はその場でその診断書をあけて読みました。それから「やっぱり桜田は耳が悪かったんだな」

と大きい声で言いました。

それから先生はあたしの席を一番前にしました。一番前にいた子は喜んであたしと入れ替わりに後ろの席につきました。あたしの席だけ席替えされました。

あたしの方はこれでちょっとは聞こえやすくなるでしょうか。少なくとも先生の声だけは。

塚本先生はみんなに「この子の耳は悪くなったので、大きい声で言うてあげるように」といったのがすごく嫌でした。

その時からみんなはあたしに用があるときは用がなくとも、わざと耳を口に近付けて怒鳴りました。耳を思い切りひっぱって怒鳴る子もいて鼓膜が破れそうになりました。

先生がそれを見ても知らん顔です。

あたしの気持ちなんかわからない先生なんか、「きょうしつかく」だと思えます。先生の一言は注意や思いやりにも何にもなっていないませんでした。あたしがもつといじめられるために言ったとしか思えません。なんて嫌な先生でしょうか。

もう1学期の給食は今日で終わりです。最後の長い昼休み時間はいつもと変わりなく図書室で過ごしました。本はやさしいです。どんな夢の世界でも見せてくれます。あたしは耳が悪くなってから、読書がもつともつと大好きになりました。

放課後だつて図書室へ行きます。5時半までは開いていますからよくいすに座つて読んでいました。たいてい放課後まで来る子はあつたし一人でしたが2年生のわたるくんも結構ひんばんに来ます。といつてもあの子はコミュニケーションとやらをとるのが難しい子です。図書室では例のわたるくんお気に入りの絵本や音の出る本を持っていました。

図書室では授業中のようにいきなり声を出したりすることはありません。わたるくんも変わったなと思えました。でもわたるくんはいつも図書室でも決まった場所にすわつて本を読みます。それは変

わりません。窓際の席です。ここでは静かに本を読みます。

わたるくんの本はたいていえびの絵がついている絵本です。えびの本でなかったらオルゴールの本です。どうして知っているかと言うと、その本を開けると電子音のメロディーが聞こえるのです。小さな音ですが気になります。いらいらすることもあります。こういう頭に響くメロディーは繰り返し返して聞くものではないと思います。どちらの本を家から持ってきてどちらかをこの図書室で見ると、なぜえびの本か、オルゴールの本かは知りません。多分本人だつて知らないというでしょう。でもこの本だけが好きというこだわりがあるのだと思います。

メロディーがうるさいとあたしが言っても多分わたるくんは言うことを聞いてくれないでしょう。だからあたしは何も言いません。2年の時に一応授業で一緒になったことがあるのでわかりませんがわたるくんは結構授業のじやまをします。だから3年生になつてもいじめられているのかもしれない。詠子先生のクラスの持ちあがりですが、詠子先生も知らないことがあるのでしょうか。ちょうどあたしが塚本先生にいじめられているのを詠子先生が知らないのと同じように。

あたしはわたるくんの邪魔をしません。わたるくんもあたしの邪魔をしません。オルゴールの本だけはやめてほしいけど、でもいいかと思つています。

また今日も体育の時間で野球をしたときに一部の子があたしを無視してバッターの順番をとばしたり、音楽のコーラスのときにオンチ！と笑いました。みんなあたしを笑うのがすごく楽しそうです。いじめというのがまさか自分にかかってくるとは思いませんでした。これもみんなあたしの耳が悪くなったせいです。それを思うとあたしは補聴器と言つのがやっぱり必要かと思いましたがママが補聴器は高い、と怒つていたので思い出してやっぱり言えませんでした。

もう1学期の終業式になりました。3年生になってからというものあたしにとって1つもいいことがありませんでした。

塚本先生の顔を思い出しただけで吐き気がします。あの先生はあたしのあゆみという通信簿に「いつもぼんやりとしてじゅぎょうに身が入っていない、ともだちがいない」と書きました。また「せいせきが落ちても気にする様子も見られずこうじょうしんというのではない」と書きました。ママはこれを見てあたしを怒りました。

そのほか音楽も体育もだめでした。音楽は音がよくわからないし、体育は運動場に出ると遠くから先生のいうことばを聞かないといけません。広い場所では塚本先生の言う言葉なんか全然聞こえません。みんなの声も風の強い日なんかは本当に全然聞こえません。

補聴器、いるのかな。でもやっぱりママには言えません。

ママは毎日夜遅くに帰ってきます。あたしはいつもいい子でいないといけません。ママはあたしのために働いています。

ママはとても忙しいので旅行どころか近くの遊園地にも連れて行ってくれません。パパはあたしが生まれる前に死んでしまったそうです。写真もありません。ママは1人で苦労してあたしを産んで育てたそうです。

今も苦労して働いているので、あたしはいい成績をとっていい会社に入ってママを楽にしてあげないといけません。でも、あたしの耳は悪くなりました。成績も下がりました。だからママは怒っています。

あたしの何もかもが気に入りません。耳が悪くなったのも成績が落ちたのもみんな気に入りません。あたしにはいいところなんか1つもない、とママは言いました。あたしは悲しい。でも仕方ありません。全部、悪いのは全部、あたしなのですから……。

## 第6話

とうとう夏休みに入りました。もう授業もありません。うれしいです。プールの日は1日おきにあるけど見学です。プール見学だけとはいえ、学校には行きたくないなあ、授業がないだけましかなあと思います。

プールのある最初の日、あたしはどうしても見学したくなくて学校には言ったものの、図書室にしようと思いましたが、

ところが図書室が閉まっています。がっかりして廊下の窓からプールを見下ろしました。ここは3階なのでプールでみんなが泳いでいるのが見えます。でもあそこへは行きたくありません。あたしは泳げないし友達もいないしプール授業なんか見学して何がおもしろいのでしょうか。時間の無駄だとは思えません。

塚本先生もプールにいました。2組の詠子先生も1組の先生もいます。プールの中にはよくは見えませんがきつとよつちゃんやしぎちゃんもいるでしょう。

あたしのいる場所なんかどこにもありません。あたしはもうれつに悲しくなつて図書室の前にある細長い消火器の陰でしゃがんで泣いていました。

するといきなり図書室のドアがゆれたのでびっくりしました。ドアノブを見上げると確かに揺れています。中からかすかですが誰かが泣いているようです。

「あーん・・・」どこかで聞いた声です。誰だろう・・・あたしは耳が悪くなったのを残念に思いながら耳をすませました。「静かにしろ」という声も聞こえたような気がします。誰かわかりません。

それから中で声がぼそぼそと続いているようですがあたしには聞こえませんでした。今度はあたしはそっと首をのばしてドアノブの上にある図書室の小さな窓から中をのぞこうとしました。窓には

内側からピンクのカーテンがさがっています。そのすきまから誰かがいるのがわかります。

今日はよいお天気です。カーテン越しに誰がいるのかわかりました。

それは太田先生でした。泣いていた子はわたる君でした。わたるくんははだかでした。あたしはわたる君がプールクラスからひよいと抜けだしたのでまた太田先生に見つかってなぐられたのかと思いましたがどうも違うようです。

太田先生はシャツを着ていましたが下ははだかです。大きなおしりが見えました。わたるくんは足をばたばたさせています。声がだせないようにされているみたいでした。

わたるくんが太田先生に何をされているかはわかりませんが、これはいけないことだと思いました。わたるくんは「ぎゃくたい」されていたのでしょうか。あたしは助けなくてはいけないと思いました。わたる君とはこの図書室でよく会いますし、1年の時に席が隣同士だったこともありよく覚えていてます。授業中勝手に立ちあがりするので迷惑しました。だけど詠子先生はわたる君はみんなを困らせたくてわざとしているわけではないからいじめてはいけませんよ、と言いました。

そう、助け合いという言葉を出しました。少ししてわたる君はひまわりクラスにうつって時々あたしのクラスに来て絵を描いたり遊んだりしました。あの時はよっちゃんやしぎちゃんともみんなで遊びました。詠子先生もよく遊んでくれました。それが今はどうでしょう。3年生になってクラスが変わると詠子先生は知らん顔です。あたしとは何度かろうかでもすれ違いました。がいつも他の子に話しかけていてあたしの方を見てもくれませんでした。

話がそれてしまいました。あたしはとにかくわたるくんを助けなくては！と思いました。こういふときは警察でしょう。でもどうやったらいいのでしょうか。早く誰か大人の人に言わないといけません。

ん。

どのくらいの時がたったのかわかりませんが太田先生がズボンをはいています。あたしはあわてて、でもそつとしのびあしでろうかを歩いて階段をあがって踊り場へいきました。あたりは静かです。何の音もしません。太田先生がろうかを通って階段をおりていくのが見えました。あたしがいるのには気づいていないようでほつとしました。

わたるくんはどうなったのでしょうか。あたしはそつと階段を下りて図書室の方を見ました。わたるくんが歩いてきます。水泳パンツ一枚のはだしのままでした。わたるくんはまだ泣いていました。そしてあたしを見つけました。わたるくんの声はかすれています。だけどひつくひつくといって泣いています。泣きながらあたしの肩に手をかけました。あたしはかわいそうにと思つてよしよしと抱いてあげました。

わたるくんの首には赤い筋がついていました。

「ねえ、これ太田先生がしたの？」

聞いても返事がありません。ただ泣いているだけです。

あたしはわたる君が泣きやむまで階段に腰をかけて一緒にいました。しばらくして静かになったので「プールに行く？」と聞いたなら「うん」といいます。なのでプールのところまで連れて行ってあげました。

するとプールの歓声が聞こえてきたあたりでわたるくんはダツシユで入口へと走って行きました。もう泣いていたことなんか忘れているようです。

「あつわたるくんだ。やつぱり来ていたんだね！」

誰か知らない子がプールのアミから顔を出してさげびました。わたるくんはさつさとプールの入口に入る階段を上がって行きました。あたしはどうしようか迷いましたが何かもう学校にいるのがイヤになったので帰ることにしました。

プールのアミから同じクラスの子がちらりとこちらを見ましたが、もうどうでもよかったので校門の方へ向かいました。

出るときふと振り返ると太田先生が1階の職員室の窓からこっちを見ていました。目があつてしまいました。

あたしはどきつとしてそのまま走つて帰りました。それからずっと夏休みは家で本を読んですごしました。塚本先生からプール見学にこいといってくる電話は2度とかかつてきませんでした。

「桜田はプール見学に来ませんでした」  
ともママに言いつけることもなくほつとしました。

あたしはプールのある日は近くの県立図書館や公園に行つて過ごしました。こうしてあたしの夏は終わりました。すぐくつまらない夏休みでした。となりの犬と遊んでいるのが一番楽しかったです。しぎちゃんが誘つてくれても盆踊りにも行きませんでした。ママの仕事が忙しくて帰りが遅く夜は1人で出歩いてはいけないといわれたからです。あたしはもう一人ぼっちでも全然平気でした。

## 第7話

2学期が始まりました。

始業式の日のことでした。学校へ行くのはゆううつでした。でもママががんばりなさい、といって新しいお洋服を買ってくれたので気分が少しだけ晴れました。そのお洋服はブルーのリボンがついたかわいいデザインです。ママは新しいお洋服の包みをはがしながらこついいました。

「これ高かったのよ。だから汚してはいけませんよ」

「うん、」

「はい、でしよう？加絵」

「はい、ママ」

ママは満足そうにうなづきました。

「本ばかり読んでいないでお友達もたくさんつくっていくのよ。そして勉強もがんばるのよ。この夏あんあは家にこもりきりで結局塾もプールも行かなかったのだから」

あたしの顔がこわばったのが自分でもよくわかりました。

悪夢な3年3組の教室へ行くとやっぱり誰もあたしには声をかけてくださいませんでした。みんな日焼けして元気そうでしたがあたしだけ白い肌のままでした。

ブルーのリボンがついたお洋服は誰もほめてくれません。やっぱりあたしは無視されたままです。ひまなので時計を見たらまだ始業式のチャイムがなるまで少し時間があります。どこかへ行きたい、と思いました。

でも時間は結構早くたちました。良いお天気だったので始業式は体育館ではなく運動場でしました。気がつけばあたしもいつのまにかきちんと靴を履き替えて整列していました。リボンがいつのまに

かしわくちゃになってつぶれていました。なのでこれもきちんとなおしました。いつでもきちんとなしないとあたしはママにも嫌われてしまいます。

みんなが運動場に集まって並んで待っているのに先生がたが来ません。どうしたのだろうと思ってみんながやがやしました。そうしているうちにパトカーがやってきました。救急車もやってきました。

なんだか変な胸騒ぎがします。やがて1組の先生がやってきて「今日は学校はありませんから帰ってよろしい」とマイクで怒鳴りました。

みんなわけがわからないままに教室へ戻りました。帰り仕度をしていると「誰かが死んだらしい」といいました。

その言葉を聞いてあたしの胸騒ぎがひどくなりました。ときどきしています。廊下で知らない5年生くらいの男の子が2、3人ではたばたと走りながら

「誰かが死んでたんだって！」

と叫びました。皆ざわざわしました。

「誰かが図書室で死んでいる！」

その声はあたしの耳にもはっきりと聞こえました。あたしもそれは一体誰だろうと思っていました。胸騒ぎはずっと続いていました。塚本先生が教室に入ってきました。

「今日は休みになったから、みんなかえりなさい」とだけ言いました。それからまた出て行ってしまいました。

クラスみんなはもちろんだまって帰るわけがありません、みんな連れだって廊下をあるきます。あたしも少し遅れて廊下に出ました。するとさつき廊下をはしっていた5年生の名札をつけた男の子たちが階段の踊り場にかたまっていました。みんな階段のてすりに顔をよせて下を向いています。

あたしは胸が痛いくらいになってどきーんとしました。

警察官や白い服を着た人が図書室の前に何人もいました。校長先生も用務員もいました。あたし全員が階段を下りようとせせずに踊り場で固まって図書室をのぞき見しました。すると上から4年生の子たちも下りてきて階段はもう上から下までぎゅーぎゅー詰りなっていました。

もつと上の方から「こらっ！みんな早く下を下りんかつ」という声がありました。下の階段の廊下から2人男の先生がやってきてみんなを誘導します。そのうちの一人が6年生を受け持つ太田先生でした。太田先生が一番前にいた6年生の男の子の頭に手をやり「ほれ、早く帰れ、ぐずぐずせずにさあ、行け」と言いました。

あたしもみんなの後について階段をおりましたが太田先生とふと目があったような気がしました。あたしは太田先生がとても怖いのでそのまま目をそらして知らん顔をして帰りました。結局何が起きたのかわかりませんでした。

だけど帰ってからお昼のテレビのニュースであたしの学校が出ていました。あたしは音がよく聞こえるようにボリウムを大きくして聞きました。

あたしの学校で子供が死んでいたとアナウンサーの人が言っています。警察官がいたのは図書室です。だから図書室で死んでいたのでしょうか。テレビはあたしの学校をうつしています。心臓が再びどきどきしてきました。あたしはテレビの前から動けませんでした。夕方のニュースにもあたしの学校がうつされていました。そして・・殺された子供の写真も出ました。それはわたる君でした！

わたる君が殺されたのです。

写真は1秒で消えましたがわたる君が体育の帽子をかぶってにっこりしている写真があたしの頭の中にはりつけられました。あたしの頭の中でわたる君がにっこり笑っています。でもそのわたる君は死んだのです。

あたしは瞬間的に太田先生がわたる君を殺したと思いました。太田先生の大きな身体を思い出してぞっとしました。わたる君よりあたしの方が図書室を利用していました。一歩間違えたらわたる君ではなくてあたしが殺されたかもしれませぬ。あたしはテレビの前でぼーとしていました。

どのくらいいたかわたりにませぬが、気がつくと電話が鳴っていました。あたしの家には電話なんかめったにかかってきませぬ。ママの仕事用にファックスが紙を吐き出すぐらいだったのでびっくりしました。電話はいつまでも鳴っています。あたしは怖くなりました。それでテレビを消し自分の布団にもぐって音が聞こえないようにしました。お蒲団の中は厚くて死にそうです。でもずっとあたしはここにいようと思います。

## 第8話

「加絵！起きなさい！」

というママの声であたしは自分がいつのまにか寝ていたのに気が付きました。

「まあなんですか。電話にいくらかけても出てこないし一体何をしていたの！」

ママの金切り声が耳にひびきました。あたしは布団から跳び起きてママにしがみつきました。ママは「汗びっしょりで、まあこの子ったら」と怒りながらもあたしを抱いてくれました。ママが帰って来たのもう夜かと思ったのですが違いました。まだ夕方の4時でした。ママが学校のニュースを知り心配になって電話してもあたしが出ないので仕事を早引けして帰ってきてくれたのです。

ママはあたしにシャワーを浴びせてそれから近くのファミリーストランへ連れて行ってくれました。あたしは気分が落ち着いてうれしくなりました。ママはあたしの様子を見て「夏休みはどこへも連れていってあげられなかったから、今日ぐらいはゆっくりしようね」と言いました。あたしはママなんか嫌いだと思っていたのは悪かったと思いました。

レストランであたしはハンバーグセットを頼みました。ママはステーキセットを頼み食べながら聞きました。

「内田わたる君って知ってるの？クラス違ったよね？1、2年の時は一緒だったと思うけど」

あたしは「うん、そう・・・」と答えました。するとママはステーキをほおばりながら

「どんな子だったの、かわいそうにねえ」と言います。

あたしはハンバーグの味がわからなくなるので事件のことは聞かないでほしいと思いました。するとしぎちゃんがパパとママに連れられて入ってきました。あたしを見つけて手をふってくださいました。

しぎちゃんは席の近くまでやってきて「あっハンバーグにしてる。あたしもこれがいい」と言いました。

となりのテーブルが空いていたのでしぎちゃんたちが座りました。ママ達はいさつしあつていました。だんだんとお客がふえてあたりが騒がしくなってきました。しぎちゃんはあたしの耳のすぐそばに口をよせて「わたる君死んじやったよねえ」と言いました。あたしは「うん」と言いました。

「授業中つくえの音をたてたりしてうるさかったけど、いい子だったよねえ」と言いました。あたしも「うんうん」と言いました。誰かが死んだ話は苦手です。怖くてなりません。

ママ達もあたし達のおしゃべりを聞いています。

「なんというかわたる君つてものをしゃべられない子だったのですよ。普通授業には出れなくて・・・」

「だから変質者について行ったのかもしれないね。危ないことです」

としぎちゃんのパパが言いました。

あたしは太田先生が犯人だと思っていたので何も言いませんでした。

ママは「学校内での事件だし犯人はすぐに見つかるでしょう」と言いました。

しぎちゃんたちのメニューが来てしぎちゃんたちは食べ始めましたがあたしはなんとなく食欲がなくなつてフォークを置いていました。

「加絵、もう食べないの。せっかく私は早引けして連れてきてあげたのに」

というとしぎちゃんのパパが「事件がショックだったのでしょうか。加絵ちゃんは繊細な子だから」と言ってくれました。

あたしはぼんやりと大人たちの話を聞いていました。

あたしの耳に音は聞こえますがほとんど何を言っているのか聞き取りにくいです。しぎちゃんは大人たちの話を熱心に聞いていまし

た。「防犯カメラ・・・目撃人・・・生徒・・・」

しぎちゃんにはあたしにも何か言いましたか食べながらだったしちよっと聞こえなくて「なに？」と言いました。しぎちゃんはうんざりした大きい声で言いました。

「さつきから何度も聞き返してばかりだよ。加絵ちゃん耳が悪くなつてかわいそう！」

これは聞こえました。あたしはうつむきました。そしてやっぱり補聴器というものが必要なあと思いました。

ママは一瞬食事の手を止めてあたしを見ました。

結局始業式は次の日になりました。あたしはかぜ気味です。お蒲団にくるまって変な時間に寝てしまいシャワーを浴びてレストランへ行ったのでまたかぜをひいてしまつたみたいです。雨が降つたので体育館でした。校長先生の声があたしの耳にはとぎれとぎれにしか聞こえません。がわたる君のことを言っているのがわかります。それからみんな首をたれてもくとうというのをしました。

テレビ局のカメラも来ていてあたし達を映しました。隣の列の2組の子がインタビューされました。殺されたわたる君は3年2組の子なのです。詠子先生がカメラに手をやり、やめてやめてというふうに手を振りました。他の先生も来ました。マイクを持った人が何かを叫びました。

あたし達は先生達に背中を押されるようにして体育館を出ました。2組の子は全員で今日のお昼からわたる君の葬式に出るそうです。みんなからとぎれとぎれに聞こえてくる声によると、わたる君は頭にけがをしてそれがもとで死んだそうです。

みんな新聞を読んでテレビもちゃんと見ていたようです。あたしの家ではママが「あんたのせいしんせいじょう、よくないからニュースは当分見てはいけません」と見せてもらえませんでした。

わたる君は本当にかわいそうでした。

教室に戻ってドアを開けると男子の大木くんがあたしに「おい」と呼びかけました。あたしはびっくりしました。大木くんは1年生の時から同じクラスですがほとんど口をきくことはありません。そこには大木くんのほかに2年生のとき同じクラスだった子が5人ほどいました。あたしをいじめる子たちでなかったのではっとして何だろう、と思いました。

大木くんは言いました。

「なあ、桜田。お前も1年と2年のときわたるのやつと同じクラスだっただろう。お前はわたるの面倒をよく見てやったよな。おしっこをもらしてしまったときも雑巾でふいてやったりさあ。おれ、あいつが授業のじゃまをしてくれると授業が中止になるんでうれしかったのさー」

「・・・」

「日直のときは当番で、わたるが廊下に飛び出したらたられ戻すために外に堂々と出れるだろう。わたるが暴れるようにしめしあわせてわざと怒らせたり泣かせたりしたんだよな。今から思えば悪いことしたよ。ほんと、殺されてしまったてかわいそうだよ」

大木くんたちがあたしに声をかけてくれたのは昼からはじまるわたる君の葬式に一緒に出ようというのだ。あたしはわたる君の世話をけっこうしていたのを覚えてくれたのだ。大木くんは女の子にやさしいので人気があるが、よくわかるような気がする。

もう一人の男の子が言った。

「俺たちだけが葬式に出たいって言っても塚本じじいには信用ねえからな。女の子も混じった方がいい。今から職員室へ行ってあのじじいに頼みにいこうや」

あたしはわたるくんの葬式に行きたくなかったので「あたしも行く」と言いました。

## 第9話

あたし達は結局10人に増えて列を作って職員室へ行きました。ドアを開けると先生がたがまだミーティングの途中で終わるまで待っていることにしました。大木くんがドアを閉める方ごちに太田先生の大きな身体が見えたのでまたどきつとしました。また太田先生と目があつたような気がしました。

ドアが閉まらないうちにいきなりぱつと開いて「こらっ」と怒鳴られました。

太田先生でした。あたし達を見てこっちへ来たのです。「大人しく教室へ戻ってろ！」と怒鳴りました。

誰かがほら言えよ、というふうにあたしの身体を押ししました。思いがけずあたしが一番前に出てしまいました。太田先生はあたしをものすごく怖い顔でにらみました。あたしは震えました。思わずあたしは廊下を走り後ろも見ずに教室へ逃げ帰ってしまいました。そして自分のつくえに突っ伏してじっとしていました。

やっぱりわたるくんを殺したのは太田先生ではないかと思いましたが。これを誰か警察の人に知らさないといけません。

どのくらいこの姿勢でいたかわかりませんが、いきなり首の後ろをぎゅっとなつかまれてあわてて立ちあがりました。つかんだのは塚本先生でした。

「桜田、何をしている！」

立ちあがると教室のみんなが静かにしてあたしを見えています。太田くんたちが塚本先生のあとについて教室に入って席につこうとしていました。あたしは多分だれかのいう「先生がきたぞー」と言うことを聞き洩らしたのでしょうか。「すみませんでした」とあやまりました。

「先生が入ってきてても知らん顔で狸寝入りできるのはいい度胸だな」

と塚本先生が言いました。あたしは先生が入ってくるのがわからなかつただけです。狸寝入りじゃないです……。でも声に出せません。塚本先生は声をもっと大きく張りあげました。

「今職員室から戻ってきたやつは1時間教室の後ろに立っておけ！ 葬式へ行けるのは2組の生徒と各学年の代表だけだ！ みんなぞろぞろ言ったら迷惑だろうが！」

それを聞いて大木くんがさっと席をたつて教室の後ろの壁に背をつけて気をつけの姿勢になりました。他のみんなもそれに倣いました。

塚本先生はまたあたしを見下ろして「桜田、お前もだろう。知らん顔したつて職員室にいたのは知っているぞ。それにな、お前が夏休み中にプールの授業をさぼっていたのも先生は知っているぞ」と言いました。

言われなくともあたしだって罰をうけるつもりです。あたしはあわてて後ろに行きました。そして木をつけの姿勢になりました。先生はじつとあたしを見てしかめっ面をしています。あたしは先生の顔をなるべく見ないように下に向いて小さくなっていました。

あたしのとりに立っている誰かがあたしの腕をぎゅつとひねりました。ものすごく痛かったです。でも声には出しません。先生に葬式へ行きたいと願う前に逃げたのは確かにこのあたしなのです。そう、あたし一人だけが逃げました。

あたしは太田先生が怖かつたのです。でも自分が悪いのはわかっているので黙っていました。となりの子は何回もあたしの腕をつねりました。そして何か小声で言っていたようですがあたしには内容が聞こえません。

他の子が夏休みの宿題を提出している間、あたし達はずっと立っていました。午前中の授業が終わると塚本先生は教室を罰掃除できれいにしたら帰ってよろしいと言いました。

今日は給食がないのでここまでです。みんなさっさと帰って行きました。

塚本先生が教室を出るとみんながやがやと好きなことを言います。立たされた子たちがあたしを取り囲んで言いました。

「桜田はひきょうものだ！」

「お前がいきなり逃げたせいでろくに話も聞いてもらえなくて、太田のヤツにげんこつを1個ずつもらったんだぞ」

「罰掃除はお前ひとりでしろよ」

あたしは「わかった」と答えました。すると大木くんが「桜田を葬式に行かないかと誘ったのはおれだ。だから俺も掃除する」と言いました。

受け取ってもらえなかった夏休みの宿題は大木くとあたしがまとめてあずかりあとで塚本先生のところへ持っていくことにしました。それで他の子も先に帰りました。みんなが帰ると教室内はがらんとしました。あたしと大木くんはもくもくと掃除しました。大木くんは重たい先生の大きい机とか持ち上げてくれたのでとても助かりました。

あたしは大木くんに話しかけませんでした。話しかけても返事がかえってきたらあたしの耳が聞こえなくて困らせることになるからです。大木くんもあたしに話しかけませんでした。1回だけ「ちり取りを」と言う声が聞こえたような気がしてでも聞き間違えだと困るので大木くんのそばまで行って「なあに」と言うと「もういい」と言われました。

きっと桜田は耳が悪いからもう何も言わないでおこうと思ったのでしょうか。とても悲しいことですがなれてしまいました。

もうみんな下校したのか学校中がシーンとしています。

あたし達もランドセルをしょって帰りがけに夏休みの宿題をもって職員室に行きました。腕いっぱいノート10人分をもつてそろそろと階段を下ります。後ろから大木くんがついてきます。大木くんもノートと画用紙を持って降りてきてくれます。

2回の図書室には何人かの大人の人がまだ出入りしていました。

図書室へ向かう廊下にはロープが張って行つて誰も通れないようにしています。あたしは何も見ないふりをしておりました。

あたしは図書室のロープも見たくなくて壁の方に顔を向けて階段を下りました。それがいけなかつたのでしよう。あたしは足をすべらせて階段のしたまで落ちてしまいました。足と背中をうって痛かつたです。それにみんなから預かつた宿題を全部落としてばらばらにしてしまいました。あたしの後ろを歩いていた大木くんが「大丈夫か！」と聞いてくれました。

足が痛くてなりませんでしたが我慢して宿題を拾いました。大木くんも手伝ってくれました。あたし達の音を聞きつけたのか大人の人か1人やってきました。この人も拾うのを手伝ってくれました。

その人はおじさんでした。頭がはげかけています。服なんか暑いのに長袖でした。タバコくさいにおいがする変なおじさんでした。

その人はあたしの足をさわって「ちよつと腫れているね。シツプしてもらつた方がいいね」と言いました。おじさんは良く見ると優しそうな顔をしていました。あたしと大木くんの名札を見て「ほうほう3年生かい。わたしの末っ子も3年生だよ。夏休みの宿題を運んでいたのか。ごくろうさんだね」と言います。

おじさんがしゃがみながらあたしを見上げてやさしく言ってくれたのでこの人はいい人だと思いました。でも、見たことのない人です。カメラがないしレコーダーも持っていないので新聞記者やテレビの人ではありません。誰だろうと思つていると大木くんが

「おじさん、警察の人？」

と聞きました。おじさんは「そうだよ」と言つて立ち上がりました。「刑事さん、ですか？」

「そうだよ」

「うわあ、かつこいいなあ！」

大木くんがなぜか感動しています。刑事さん、と聞いてあたしは真つ青になりました。おじさんはあたしの顔を見ました。

「どうしたのかね。足が痛いかね。おんぶして保健室へ連れて行ってやろうか」

あたしは断りました。

「・・・いいです。ありがとうございます」

おじさんはあたしが持つていた宿題を全部持ってくれました。あんまり刑事さんらしくなくて拍子抜けします。テレビに出てくる俳優さんぽくもなく近所のおじさんみたいです。あたしはふふっと笑いそつになりました。

「職員室へ行くんだろ。おじさんも用事があるから一緒に行こう」と言いました。あたしは足をひきずりながら残りの階段を下りました。

大木くんが好奇心いっぱいにしておじさんに質問をします。

「わたる君を殺した犯人はわかったのですか」

「今、調べているところだよ」

「おれら1年と2年の時同じクラスだったんです。早く犯人を捕まえてください」

## 第10話

あたしは言くをつめて2人の会話を聞いていました。足の痛みはあまり感じませんでした。あたしは夏休みに見たわたる君と太田先生の様子をこの人に言おうか迷いました。

職員室に行ったらちようど黒い喪服を着た塚本先生がいたので宿題を受け取ってもらえました。塚本先生はあたし達が警察の人と一緒にきたので驚いていました。

おじさんは「この子たちは居残りですな。早く気をつけてお帰りよ。みんな午前中に帰ったのだから」

と言いました。これをつけて大木くんが「葬式へ行きたくて職員室まで頼みに行ったのに塚本先生がだめだ、つて。しかも勝手に教室から出て来たつてことで罰をうけたんです」と言いました。

それも塚本先生の前で言いました。おじさんは「そりゃあ大変だったね。2年間も同じクラスだったらお別れに行きたかっただろうにね」と言ってくれました。

塚本先生はおじさんにぺこぺこしました。

「希望者が多くて調整ができませんで、いやこれは・・・」とかむにやむにやいつていました。

最後の言葉は聞き取れませんでした。が塚本先生がうるたえているのがちよつとおもしろかったです。先生は宿題を受け取ると職員室へ入りまたすぐに出てきて「では失礼します」と言いました。

すると大木くんが大声で「先生、連れて行ってよ!」と言いました。あたしはびっくりしました。塚本先生はおじさんの顔をちらちらと見ながら説明します。

「みんなのしめしがつかんじゃないか。わたる君には心の中で手をあわせてあげるとお葬式に行ったのと同じだよと言っただろうが」

それから塚本先生はおじさんに「ご苦労さんです」と一礼して玄関の方へ行きました。

大木くんは先生の後ろ姿に向かつてあっかんべーをしました。あたしはその顔を見て笑ってしまいました。するとひよいと塚本先生が振り返ったのであたしが笑っているところをばっちりみられてしまいあわてました。

あたしは塚本先生の姿が見えなくなるまで黙って立っていてそれから大木くんに言いました。

「あんなことを言ったら先生にいじめられるわよ」

「いいよ、俺は成績悪いし、豊成や佐々木みたいに美人じゃないからな。えこひいきばかりして嫌なやつだ」

と言います。それもおじさんに聞こえるように大木くんははつきり言いました。あたしは大木くんがそう思っていたのを知らなかったのでびつくりしましたが同時にうれしかったです。

おじさんは苦笑していました。あたしは足がずきずきしてきたので、おじさんと大木くん保健室に連れて行ってもらいました。でも保健室にはもう誰もいなくて鍵がかかっていました。

おじさんは自分の車の中にシップがあったと思うからとってくると言いました。そしてそのとおりにしてくれました。とてもやさしいおじさんです。おじさんはあたしの足元にしゃがんでシップの透明のシールをはがしてあたしのひざに貼りつけてくれました。この人があたしのお父さんだったらいいのになあ、と思いました。

大木くんもあたしが耳を悪くしたのを全然バカにしていないとわかってほっとしました。おじさんは改めて自己紹介をしました。

「さつきもいったかもしれないけど、私は実は刑事なんだよ」

あたしと大木くんはもう知ってるよ、というふうに関を見合わせて笑いました。「刑事さん」を見るのは初めてですがやさしい顔をしたおじさんで全然怖くありません。でもなんだかどきどきしてききました。

刑事のおじさんは「わたる君はどんな子供だったかを聞かしてくるかな」と言いました。大木くんはすぐに「わたる君はいい子だったよ」と言いました。

大木くんはわたる君のことを話しました。

「ぼくはね、きつとわたる君が知らない人について行ったと思うよ。だって誰にでも後をつけて回ったり、逆に機嫌が悪いとかみついたりするんだ」

あたしは大木くんの話も気もそぞろでおじさんの顔ばかり見ていました。そして「あのこと」を言おうかどうかと思いました。おじさんはあたしを見ました。

「もしかして、君。私に何か言うことがあるかな？ だったら教えてくれるかな？」

あたしはゆつくりとうなづきました。それからあのプールの日に見たものを離しました。大木くんはびつくりして目を丸くしていました。おじさんはやさしい目をしてあたしのいうことを聞いてくれました。それから「ありがとう、良く言ってくれたねえ」と頭をなでてくれました。

あたしはおじさんに「太田先生にはあたしが言ったということは黙ってて」と頼みました。自分から行つたくせにあたしは怖くなつたのです。おじさんはうなづきました。

「大丈夫だ。怖いことは何もないから」と言いました。そしてポケットから紙を一枚取り出しました。それは名刺でした。裏に大きく携帯電話の番号を書いてそれをあたしにくれました。

「何かあつたらこの番号にかけなさい」

## 第11話

あたしは安心しました。おじさんはあたしの名前と住所と電話番号を聞いて手帳に書き留めました。おじさんは最後にどうして誰にも言わなかったのかと聞きました。あたしはどきーんとしました。

「家族にも言わなかったの、どうしてだい」

ママに行っていればわたる君は死ななくて良かったのかもしいない、と思います。わたる君の顔がわつとあたしの頭の中いっぱいにくらんでみえました。

じんわりと涙が出てきます。あたしはごめんなさい、と泣きました。おじさんはあわてて怒っているのではないよ、と言いました。

だってあたしの話なんかママは聞いてくれません。ママはあたしの耳が悪くなつてのをとても恥ずかしがっています。

塚本先生も耳のほかに顔もおせ、と言って笑いました。みんなあたしの耳が悪いのをバカにします。他の子も読んでも返事しない！と怒ります。あたしには、あたしには・・・最後は言葉になりませんでした。

大木くんはあたしの肩に手をおきました。

「俺はバカにしたりしないよ。でも塚本のじじいは確かにこの子が耳が悪いからと言って教科書の読む順番をとばしたりしていたよ」

おじさんは黙ってあたし達を駐車場に連れて行き「車の中に入りなさい」と言いました。

大木くとあたしはそのまま警察へ連れて行かれました。おじさんがずつとついてきてくれました。あたしは警察で他の刑事のおじさんにあのことをもう1回しゃべりました。

夕方ママがあわてた様子で迎えにきました。大木くんのママも一緒でした。おじさんが警察で預かっていると電話したようです。ママ達は心配そうにしていました。

帰り際におじさんはあたしに「例の人を取り調べてみましょう」

と言いました。

翌朝の新聞にはもう太田先生がこうそくつていうのをされたことが載っていたようです。あたしは読んでいませんがママが教えてくれました。あたしはママが学校へ行かなくてよろしい、といったので今日は休みです。家にいてずっと本を読んでいます。

ママは塚本先生のことをずっと怒っていて仕事を休んで教育委員会に訴えに行く、と言っていました。大木くんが刑事さんからでもあたしが塚本先生にうけた仕打ちを聞いたのでしよう。

ママはあたしをも怒りました。

「どうしてそんな大事なことをママに言ってくれないの。わたる君のことだつてそうよ！あんたはもう3年生なんだからもつとしっかりしないと！」

あたしはなんにも悪いことはしていません。怒られるのは割に合わないと思います。でもあたしはじつと我慢して聞いていました。

ママは教育委員会に出かける前にもちらとあたしを見て、「わたる君が死んだのもあんたのせいよ！」と言いました。そう言われてあたしの足の方からずーんと冷たいものが上つてきました。足の痛みはもう治ったのに寒気はずっと続きました。吐き気までしてきます。1人になってあたしは家の中でずっと泣きました。誰かがピンポンと鳴らしていてもドアは開けませんでした。

「おーん、いるんだろう。加絵ちゃん私だよ、きのうのおじさんだよ」とインターホン越しに叫んでいましたが返事もしませんでした。あたしの心の中は「ざいあくかん」というもので一杯だったのです。

その夜ママは上機嫌で帰ってきました。

「ママ、教育委員会はどうだったの？」

あたしはママが何をしたか心配でした。あたしには考えることが

多いです。ママのこと、わたる君のこと、耳のこと、太田先生のこと、塚本先生のこと、警察のおじさんのこと……。

ママは「これから結果をはっきりと見せてもらうわよ」とだけ言いました。それを聞いてあたしは余計に不安になりました。

ママはおもむろにかばんから小さな包みを取り出してあたしにくれました。あたしにお土産を買ってきてくれたのです。

「これ、何だと思う？すごくいいものよ！」

「わあ、何だろう。ママありがとう」

包みを開けると堅い小さな箱が出てきました。この中に何か入っています。あたしはまたかわいい小物かな、ヘアアクセサリーだといいな、と思いつながら開けましたが違いました。開けてみるともっと小さな変な形のがコロんと2つ出てきました。

ママが言いました。

「これは補聴器ですよ。これでよく聞こえるはずよ。加絵、うれしいでしょ？」

あたしはうれしくありませんでしたが「うれしい」と言いました。ママは得意げでした。

「これ安かったから得をしたわ。別にオーダーメイドの高いものでなくともこれで十分ですよとお店の人が言うしね。それでもやっぱり家計に響くお金がかかったわ。だから大事に使うのよ、わかった？」

「……、わかったわ、ママ」

「これを使えば良く聞こえるし、そうすれば成績も上がるでしょう。ああ、それとね、補聴器をつけているのが見えないようにしないと。隠さなきゃいけないからもうちょっと髪をのばそうね。補聴器が見えるとみっともないからねえ」

「……わかったわ、ありがとう、ママ」

補聴器は変な形をしていました。あたしの耳には少し大きくてどつかすると耳からでっぱりそうになります。確かに音自体は大きく聞こえます。でもヒューヒューとか、ビーという音も聞こえます。

ママに訴えると「慣れるまで時間がかかるそうよ。だから我慢しようね」と言います。

そのヒューとかビーとか言う音はどこかわたる君の持っていたオルゴールの本から聞こえる電子音を思い出します。あたしはせつかく買ってくれたママには悪いけど、気持ちが悪いです。

夜はすぐに来ます。そしてわたる君が夢に出てきました。わたる君は泣いています。ただひたすら泣いています。あたしは教室へ戻ろうと言おうとしますが口がきけません。あたし達のいるところは図書室の中です。わたる君がよく聞くオルゴールの本の電子音が聞こえます。耳障りな嫌な音です。早くここを出ないとだめだと思っているのに手も足も動きません。

怖い夢でした。

夢うつつでママの音がしています。あたしはそれで怖い夢から解放されました。寝ているときに確かお客様がきていました。時計は11時をさしています。

あたしは半分寝ぼけたままそつと玄関をうかがいました。玄関にいたのは塚本先生でした！校長先生ともう一人知らない男の人もいます。塚本先生達はママにむかってぺこぺこしています。

何をしているのでしょうか。でもあたしの耳には何を言っているのか聞こえません。あきらめてあたしはママに見つからないようにそつとお蒲団の中に戻りました。ママが何かを怒鳴っているようですが良く聞こえません。

あたしは塚本先生に会いたくないし、ママの怒る声も聞きたくありません。お蒲団を頭からかぶります。そして違う夢を見ようと思いました。

2度目の夢の中でもわたる君はまだ泣いていました。夢の中に入り込んで夢の中であたしを待っているのでしょうか？

でも、どうして？

..しんせいのへんせいのせいのせい

## 第12話

確かに深夜遅く3人の来客があった。校長先生と塚本先生、それに舞子が今日訴えにいった教育委員会の担当者である。

舞子は加絵の担任の顔を見て感情を爆発させた。

「あんた！あんなに素直でやさしい子をよくも！教師でありながらいじめることがよくできますね！ええ？塚本先生？あんたの態度を見てクラスメートの様子が変わったのです。かわいそうに。証人だつてちゃんといますからね。許せない、許せない！」

「いや、あのう、桜田さん・・・」

「夏休み前の懇談会からどうも変だと思っていたのですよ！2年生の時とはあまりにも評価が違うから！でも成績が下がったのも病気の生徒はいつても、あんたの配慮が足りないからよけいにやる気がなくなったのではないですか？」

「桜田さん、落ち着いて良く聞いてください。私はただ励まそうとただだけです、かわいい教え子をいじめたりバカにしたりは決して・

「言い訳はしないで！」

塚本は深く頭を下げた。

「桜田さん、塚本君はすべて誤解だと言っていますよ。お子さんをただ激励しただけだ、と」

校長がとりなした。今朝校長の部下である太田教諭が生徒を殺した容疑で警察に拘束された。そして今度は教え子に対するいじめで告発を受けた。校長は偶然にも教育委員会で訴えに来た舞子と鉢合わせしたのだ。舞子に詰め寄られ校長はすぐに善処すると答えたのだ。折悪くそこにはマスコミも居合わせていたので苦渋した。

校長は憔悴しきった顔だった。舞子は構わず今朝都庁で言ったセリフを繰り返す。

「誤解ですって？いいえ！あなたの学校の教師どもは一体どうなっているの？子供を殺したり、いじめたり！無茶苦茶じゃないの！」  
校長はさらに深く頭を下げる。

「とにかくなんとかして！この男が教室にいる限り、私は大事な子供を学校に行かせられません！」

話は日付がかわっても延々と続いた。舞子は教師は忙しい。ことをうやむやにしてはそのままになるだろうと思っている。だから結果が出るまでこれらの客を返すつもりはなかった。だって私の大事な1人娘だもの！

私のかわいい子をいじめるなんて。

この子を守るのは私だけ！

さあ、誠意を見せて。

これからどうするの？

どうしてくれるのよ！

その夜中、加絵はわたるくんの夢をまた見て苦しんでいた。どうしてあんなふうに泣くのだろう。バックにはあの音楽が耳に響く。どうにかしてくれないか、気が狂いそうになる。ああ、わたる君、わたる君……。

次の日の朝、ママは学校へ行きなさいと言いました。あたしは寝不足です。寝不足でなくとも学校へは行きたくありません。

昨日は休ませてくれたのに、ママはきまぐれです。行きたくない、と言うとママは怒りました。あたしはママには逆らえません。支度をして行くふりをして、また公園にでも行こうと思います。

ランドセルを背負うとママの機嫌は良くなりました。

「加絵、補聴器はつけた？ほら、きのうのお土産の補聴器よ」

「はい」

「補聴器を付けているのは他の人には見えないようにするのよ」

「はい」

「髪をもう少し横にやって。どうすると見えないから」

「はい」

ママはあたしが言う通りにすると本当に上機嫌です。

「もし誰かに殺人事件のことを聞かれても知らないというのよ」

「はい、ママ」

「それとね、加絵。塚本先生が今日から担任をはずされて臨時の先生になるから。よかったわね。これでもう何も嫌なことはありませんからね。ママがちゃあんと加絵のことを思ってそうしてもらったの。ママはがんばったのだから、加絵もがんばるのよ」

ママは勝ち誇ったように言いました。

昨日来た先生達の話はこのことだったのかあ、と思いました。やっぱりあたしのママはこの世で一番怖くて強い人です。

あたしはママにばいばいと手を振って家を出ました。

外へ出ます。風が少し冷たくなったようです。とんぼが1匹飛んでいます。もう秋になったのかあ。今年の夏休みはつまんなかったなあ、と思いながら道を走りました。

もちろん学校と反対方向の道です。学校へ行くのは怖いですが、でもママにばれるのはもっともつと怖い。だからばれないようにしなくてはいいけません。

臨時の先生なんか会いたくない！いじめっ子には会いたくない！あたしはなるべくみんなに出会わないように裏道の神社道を通りました。

走っていると耳の中の補聴器がびゅーびゅー鳴ります。走る速度を上げると雑音がひどくなります。もうこんなもの捨ててしまいたいと思いますが捨てたらママが怒るでしょう。とうとう耳が痛くなったので神社に着いてから一服しようと座っていたら知らないおば

さんが後ろからついてきました。

そのおばさんはまっすぐにあたしの顔を見ました。

あたしを捕まえにきたのかしらと思ってもう一度走ろうとしたらおばさんはぺこりとあたしにおじぎをしました。あれ、と思うとおばさんは「桜田加絵ちゃんですね」と聞きました。

あたしがうん、とうなづくとおばさんはもう一回おじぎをして「私はわたるの母親です」と言ってからまたおじぎをしました。

あたしがどうしていいのかわからなくて考えているとわたる君のママはハンカチを出して顔の汗をふきました。

「加絵ちゃん、ちょっとだけおばさんとお話してくれる？」

あたしは仕方なくはい、と言いました。神社の石に腰かけました。おばさんはゆっくりとあたしに話しかけました。

「ごめんね、あなたのママにお話しさせてくださいと頼んだけど、会わせてもらえなくて。内緒でお願い」

「おばさん、いつあたしの家に来たの？」

「最初は電話でね。でも断られて今朝あなたがお玄関から出てくるところを見て追いかけたのよ。学校と反対方向へ走って行くからびっくりしたわ」

おばさんは学校をさぼったあたしを怒るようではありません。おばさんは眼鏡をかけていますがその眼鏡の奥は涙で光っていました。

「おばさん、大丈夫？」

「ごめんね、泣いたりして」

「ううん、わたる君はほんとにかわいそう。お葬式に行けなくてごめんなさい」

おばさんの目から涙がいっぱいあふれてきました。

「加絵ちゃんには1年2年と同じクラスでよくしてもらったそうね。ありがとうね」

おばさんは泣きながらあたしの手を握りました。温かい手でした。あたしもなんだか悲しくなって泣きそうになりました。おばさんは

小さなかばんからわたる君の写真アルバムを出しました。

わたる君は写真の中で笑っていました。あたし達はしばらく黙って写真を見ていました。あたしは夢の中のわたる君は泣きやんだかなあ、と思いました。

「加絵ちゃん・・夏休みにわたるを見たそうね」

「おばさん、誰から聞いたの」

あたしは刑事さんや大木くんが約束を破ってうらぎったのかと思いました。でもそれは間違いでした。

「わたるからです。あの子は口がきけないけれど、でも絵と字が書けますのでね」

わたるが書いた絵は2枚あったそうです。2枚とも刑事さんに渡したといいました。

2枚のうち1枚があたしらしい女の子の絵でひらがなで「さくらだ」と書いてあったそうです。もう1枚は大男のつのがはえた鬼の絵で「おおたのあほ」と書いてあったそうです。

おばさんはあたしに説明しました。2枚の絵は1組になっていて真ん中にプールが大きく書かれて、絵はプールでつながれているようだったといいます。あたしが書いてある側はお花が散らばり、もう1枚の鬼の絵は手ばかりが大きく広げられていたそうです。

おばさんは悲しそうに言いました。

「この絵を見たときに気付いてあげられたらよかったけれど・・。あの犯人に前からわたるが何をされていたかを。でもあの子は何も言わないし、言えなかったのでしょう」

あたしは黙っていました。わたる君はあたしのことを絵に書いてくれたのです。同じ図書室にいてもあたし達はおしゃべりしたりしませんでした。でもわたる君はあたしのが好きだったのです。あたしも悲しくなってきました。

ああ、わたる君が生き返ってくれたらこのおばさんもあたしもどんなにうれしいでしょう！

でもうまく言えません。それに頭痛と寒気が出てきてあたしは震えていました。

あたしは震えながらもどうしようかと迷いつつ図書室で見たことを話しました。おばさんは大きく目を見張ってじっと聞いていました。

「この話は内緒なの。刑事さんは知っているけれど……。わたる君を助けてあげられなくてごめんなさい」

おばさんの顔は真っ青でした。あたしは話してしまったことを後悔しました。

「桜田さん、話してくれてありがとうね」

変な声でおばさんはそういうと神社を出ようと思いました。数歩歩いてあたしの方を振り返り何か平たい包みを出しました。

「これ、わたるが好きだったものです。桜田さん、もらってくれない？」

あたしは包みを開けました。

開けるなりぞっとしました。それはわたる君がいつも図書室で聞いていたオルゴールの本だったのです。

「この本は・・・」

「ええ、わたるの好きだった本よ。これと同じ本をお葬式に来てくださった生徒さん達にお配りしたの。桜田さんももらってね。そしていつまでもわたるのことを覚えていてやってくださいね」

「・・・こんな本、いいません！」

あたしはおばさんに本を投げつけると走って逃げました。本が開いてしまったのかあの聞きたくもないオルゴールの音が小さく聞こえてきます。でもそれはすぐに聞こえなくなって安心しました。おばさんにわたる君のアルバムを返すのを忘れて持ってきてしまいました。あたしはこれをどうやって返そうと考えながら走っていきま

した。  
どこまでも！

### 第13話

公園に行きました。走りつかれたので座りたかったのですがベンチにはおじいさんや浮浪者の人が寝ていて全部ふさがっています。それで川の堤防に行きました。

堤防は公園よりも涼しい風が吹いていて、きてよかったと思いました。

今頃は2時間目ぐらいでしょうか。みんな教室の中で勉強していることでしょうか。塚本先生の替わりになった臨時の先生ってどんな人でしょうか。

あたしは風に吹かれながらランドセルから教科書をばらばらとめくりました。新しいペー지를1人で見たってよくわかりません。あたしは勉強嫌いだなあつて思います。そしてため息をつきました。

ランドセルの底からハーモニカが見つかり吹きました。「カエルの歌」だけは暗記しています。堤防で吹くと教室の中で吹くよりも音が遠く広く伸びて、上手に聞こえます。おもしろくなって何度も吹きました。

「加絵ちゃん、じょうずだねえ」

はっとして振り返るとこの間のおじさんがすぐ後ろに立っていました。足音とか全然聞こえなかつたので気付きませんでした。このおじさんは刑事です。きのうも家に来てくれたはず。インターホンから声が聞こえてもあたしは身をすくめてじっとしていたので会っていません。居留守の使ったのは悪かった、と思います。でもおじさんはそんなことにこだわっていないようでした。

「ハーモニカかあ。懐かしいよ。今吹いていたのはカエルの歌だね。思わず歌いたくもなるねえ」

「おじさんも子供の頃、ハーモニカをふいたでしょう？」

「そうだね。ハーモニカは懐かしいね。こういう長めの良いところ

でふくのが一番いいなあ、今の曲、本当によかったよ」

あたしはハーモニカをふいてこんなほめられたことはなかったのぢよつとびっくりしました。でもこのおじさんがちよつと好きになりました。

「ところで加絵ちゃんは学校は行かないのかい」

あたしは返事をしませんでした。おじさんは草の上にすわり、あたしもそうするようにすすめました。あたしはスカートを汚すとママにしかられるからと断りました。するとおじさんはポケットからハンカチを出して広げてくれました。あたしはその上にすわりました。

「加絵ちゃんはママのことがすきかい」

「うん……。ママはあたしによくしてくれるからね」

その時風が吹いて補聴器がキーンと鳴りました。あたしは耳を押さえます。

「加絵ちゃんはいえらいねえ」

おじさんは必要以上に声を大きくしました。おじさんに初めて会ったときはまだ補聴器を買ってもらっていません。今はしているのの前に聞いた声よりも大きく聞こえるのは当然です。その上にあたしの耳のことを大木くんが言ったのでわざと大きめの声で話しているのでしょうか。

まわりに人がいないからいいものの、大きく口を開けてしゃべるのはやめてほしいと思いました。

あたしはママのいうとおり補聴器を付けているのも恥ずかしいし、耳が悪いの知られるのも恥ずかしい。そして気遣いもされるのも、とっても恥ずかしいのです……。

だからあたしはもう行くとうしました。

「おじさん、あたしやっぱり学校へ行きます。さようなら」

「待つてくれないか」

おじさんはあたしの腕をつかもうとしたので、あたしは振り払いました。

「ごめんよ、君が見たことをもう1つだけ聞きたいのだ」

夢で見たわたる君の泣き声がどこからか聞こえてきます。  
えーん、えーん……、  
と。

あたしはぞつとしました。忘れかけていたのにひどいおじさんです。おじさんはすわったままであたしを見上げて聞きました。

「さつき神社でわたる君のお母さんと話していたね」

おじさんはやっぱり警察の人です。朝からあたしのことを見張っていたのでしよう。おばさんもあたしを見張り、おじさんはおばさんとあたしを見張っていたのです。

あたしはこのおじさんを振り切るのは学校へ行くしかないと思いました。わたる君のことで話すことはもう何もありません。

また風がぴゅーと吹きました。髪がざつとばらけました。あたしはあわてて補聴器が見えないように髪をなおします。おじさんはあたしの仕草をじつと見ていました。

「ああ、加絵ちゃん。それ補聴器だね。買ってもらったんだね。よかったね」

ああ、いやだいやだ。補聴器を使っているのがばれてしまいました。この分なら学校へ行ってもすぐにはれるでしょう。またいじめられるのかもしれない。

「加絵ちゃん、どうしたんだい。そんなに隠さなくってもいいじゃないか」

あたしは首をふりました。

「耳を出すと補聴器が見えるからみつともないでしょ」

「どうしてみつともないって思うのかな？補聴器はメガネや杖、車いすと同じようなものじゃないか。必要なモノならば隠す必要もないじゃないか」

「でもママがそう言うの」

おじさんは口をつぐんで悲しそうな顔をしました。あたしはおじさんの顔を見ました。こんな顔をしてあたしを見た人はいませんでした。

「加絵ちゃん」

「はい」

「耳が悪いのって恥ずかしいことじゃないよ」

「はい」

「補聴器なんか堂々と見せたらいいじゃないか」

「・・・それはいや」

あたしはおじさんに対して心の中で「なに言ってるんだい！」って思っていました。だってあたしが耳を悪くしたせいでママは怒るし塚本先生はいじわるしたし、病気になるしなければ耳鼻科のあの大嫌いな先生にぐいぐいと器具をつっこまれることもありませんでした。聞こえが悪くなってからいいことなんか一つもありませんでした。

あげくのはてには殺人事件です。あのプール見学の日にわたる君を見たせいで怖い思いもしました。あたしがもつと早く誰か大人の人に打ち明けていればわたる君も殺されることもなかったでしょう。あたしはわたる君が泣く夢を見ます。これからだつてわたる君はあたしの見る夢の中でずっと泣くのでしょうか。あたしにはわかりません。だつて太田先生が捕まっても、わたる君はわたる君のママのいる家にはもう帰れないのです。

もしかしたらみんなあたしのせいかもしれません。あたしの耳が悪くなかったらきつとプール見学ではなくプールで泳いでいたでしょう。隣の席の豊成さんとも仲良くなったでしょう。聞き取りテストの点数も悪くならなかったでしょう。

何よりわたる君と太田先生のあの光景を見ることがなかったでしょう。あたしが見たからあんなったのかもかもしれません。あたしが見なかったら殺人事件も起きなかったかもしれない。



「もう大丈夫なの？もう夏はすぎちゃったのにそんな恰好をして寒くないの？・・・あれ、ここはどこ？ね、ここはどこかわかる？」  
わたる君はしゃべれないので返事は期待しませんでした。あたしは足を止めてあたりを見回します。みたことのない景色です。なにもかも夕暮れで赤く見えます。家も木も山も空も・・・見たことのない赤さでした。

「早く帰らなきゃ・・・」

あたしはつぶやきます。

「ねえ、わたる君、帰ろうよ」

あたしはわたる君の手を取ろうとしました。わたる君はあたしの手をさけました。

「家に帰らないと怒られるよ、すぐに夜になっちゃうし危ないよ」  
わたる君はあたしを見ました。そしていやいやをします。手を後ろにやって首をぶんぶんふるのです。何度も何度も首をぶんぶんふるのです。

「わたる君、そんなにぶんぶんすると首がちぎれちゃうわよ」

あたしはわたる君の肩に手を置こうとしました。わたる君は後ずさりしてもっと激しく首をぶんぶんふります。

「わたる君、帰ろうよ！」

「わーっ」

とうとうわたる君は声をあげて泣きはじめました。

「わたる君！」

わたる君は泣きながら自分で自分の首の後ろに手をやって首を振るのです。ぶんぶん、ぶんぶん、と。

「わたる君、だめよ、そんなことしちゃ、だめ」

わたる君はまだ泣いています。あたしはとても困っています・・・

## 第14話

「ああ、加絵ちゃん！気がついてよかった！」

「よかった、よかったね」

ママの顔が大きく見えました。白い服を着た人たちがあたしの周りを囲んでいます。それは病院のお医者さんや看護師さんでした。遠くにあのおじさんの顔も見えました。

「もう大丈夫でしょう。脳しんとうですんだのは、奇跡ですよ」

お医者さんらしき人が話しています。ぼそぼそとした声も聞こえますが内容まではわかりません。あたしはもう1回ママの顔を見ました。ママの顔は泣きそうでぐしゃぐしゃになっていました。

「加絵、本当によかった！あんたは車にひかれたのよ、覚えてる・・・？」

あたしはぼんやりした頭のままあいまいにうなづきました。ママは、はあっとため息をつきました。それから背筋をしゃんと伸ばして怒りだしました。

「学校をさぼるから車にひかれたりして痛い目にあうんです！」

ママは立ちあがってあたしを見下ろしました。いつものママになりました。怖い顔をしています。

「聞こえているの、加絵。あんたは学校をさぼったから車にひかれたのよ。ママの言うことを聞かないからバチがあたったのですよ！」

「まあまあ、お母さん。小言はあとにしましょう」

例の警察のおじさんがママの方に近寄って言いました。ママはくるりとおじさんの方を見て言いました。

「あなた、まだいるのですか。さっさと帰ってくださいって言ったでしょう。もう、この子には近づかないでください」

「いや、お母さん。1つだけ加絵ちゃんに聞きたいのですが」

「いいえ、こんな状況で無理やり話させようとするなんて一体どういう神経をしているのですか！人権無視じゃないの！」

あたしは頭が痛くなってきました。そしてママの声が聞こえないようにシーツをかぶりました。こうしていればまだ話声は聞こえても、内容までは聞こえません。と、いきなりシーツ越しにおじさんの声が唐突に大きく聞こえました。

「じゃあ、加絵ちゃん。おじさんは帰るから。今日はごめんね、ゆつくり休んでね」

「帰ってください！」

ママの金切り声がおじさんの声にかぶさりました。そして静かになりました。あたしはやれやれと思いました。それから眠くなったので寝ました。起きるとまだママはあたしの枕元にいました。

あたしはまたママが何か言うかと思つてどきどきしました。ママはあたしに言いました。

「起きたのね。お医者さんが念のため1晩だけ入院しましょうつて。まったくあんたみたいに手のかかる子はいませんよ。本当にもう」

「ママ、ごめんなさい」

あたしはまだ頭が痛かったのですが何も言わずにいました。頭が痛いというとママはまた怒るでしょう。我慢できるから我慢しようと思いました。

「ママ、あのおじさんはもう帰ったの。あたしは車にひかれて気絶したのね。あのおじさんが病院に連れていってくれたのね」

「・・・そうよ。もしスピードを出した車だったらあんたはもう死んでいたでしょうね」

あたしはぞつとしました。そして助かってよかったと思いました。ベッドに寝たまま窓を見ますともう夕暮れでした。窓から見える家並みが赤く見えます。あたしは夢の中の夕暮れを思い出しました。「ママ、寝てる間にわたる君に会ったよ。まだ海水パンツのままです泣いていたよ。あたしの夢の中ではわたる君はずつと泣いているの。だからあたし困っているの」

ママはぎょつとした様子でした。

「加絵、何をバカなことを言うのです。気が狂ったと思われまますよ。」

いい子はそんなことを言っではいけません。夢の話はやめなさい」「  
「・・・じゃあ、やめる。ねえ、ママ、あのおじさんはあたしに何を  
聞きたがっているのだろう」

あたしはおじさんの様子が気になってきていました。

「加絵、いいからもう1回寝ていなさい。夢は夢です。そりゃあ先  
生からのいじめや殺人事件に巻き込まれてあんたはつらい思いをし  
たかもしれないけれど、もうこれはすんでしまったこと。終わった  
ことをいつまでもぐずぐず考えないの」

「でも、ママ・・・」

「ママの言うこと聞こえないの？いいから寝なさいっ！」

ママは金切り声を出しました。こうなったらあたしはもう何も言  
えません。あたしはあきらめてもう1回寝ることにしました」

やっぱり夢の中ではわたる君が出てきていつまでも泣いていまし  
た。あたしはどうしていいかわかりませんでした。夢の中でも頭が  
ずきんずきんとして痛みます。

わたる君に、学校に、補聴器に、塚本先生に、塚本先生の変わり  
になった新しい臨時の先生に、補聴器にママにわたる君に学校友達  
耳の病氣補聴器殺人事件わたる君に泣くわたる君わたる君・・・

わたる君、わたる君！わたる君に！

あたしはこれから何をしたらいいのか全然わかりませんでした。

次の日あたしはもう1回頭の写真を撮られてから退院しました。

ママは1晩あたしに付き添ってくれたようです。ママはやさしくあ  
たしの手をひいてくれました。頭にできたたんこぶがまだ痛みます  
がうれしかったです。頭はもちろん包帯でぐるぐる巻きにされてい  
ました。

補聴器は無事で、あたしの枕元にちよこんとありました。つぶれ  
てしまえばよかったのに、いらなかったのに。でもそんなことをい  
うとママが怒ります。

ママの手で耳の穴の中に補聴器が入れられるときはため息をつい



りました。

その男の人があたしに「全然怖くないからね」と言いました。あたしは全然怖くありませんでした。

なぜなら前に聞いたことをもう1回だけ話してくれということだったからです。警察って変です。どうして何度も同じ話を聞きたがるのでしょうか？

## 第15話

おじさんがあたしの正面のいすに座りました。あたしは手をどこにやっつけていいかわからなくてもじもじしています。おじさんがここにこして聞きました。

「加絵ちゃん、わたる君がいじめられるところを見たんだろう?」

「・・・はい」

「いつだったけ?」

「プールの日・・・」

「何日か覚えているかい」

「いいえ」

「わたる君と一緒にいた相手は誰だったけ」

「太田先生、です」

「2人だけだった?」

「はい」

「その時、きみはどこにいたの」

「図書室の入口、です」

「中にいたのは、だれ」

「だから太田先生とわたる君、です」

「もう一度聞くが本当に2人だけだった?」

「はい、多分」

「加絵ちゃん」

「はい」

「その時に何か変な音は聞こえなかった?」

「音、ですか」

「そつだ」

「・・・」

「聞こえなかったのだね」

「聞こえませんでした」

「耳、ちょっとだけ悪いのだったね」

あたしはだんだん腹がたってきた。前と同じことを聞いたあげくにあたしの耳のことを言うなんて。でもあの時太田先生は何かを言っていたような気もしますが内容まではわかりませんでした。でも耳が悪くなくとも普通の人でも聞こえなかったかもしれないでしょう。何もあたしに耳が悪かったのだね、と確認することは、ないと思います。まるで塚本先生のやり方みたい。あたしはおじさんに腹をたてました。

あたしはおじさんの顔を見ました。おじさんもあたしを見ました。あたしは自分の手を組んでぎゅっとスカートをつかみます。おじさんは話を続けました。

「加絵ちゃん、その、わたる君が死んだのは知っているね」

「わたる君はいつ死んだのですか」

「あれ？加絵ちゃんは新聞やテレビを見てないのかね」

「ママがだめだというので見ていません。そういうのをみるとピーテースデーになると言われました」

「PTSDのことかな。そういうのはPTSDにはならないからね」  
おじさんと若い男の人がくすつと笑った。

「・・・加絵ちゃんのパパは怖い人だね」

「あたしの家では子供は新聞やテレビのニュースを見てはだめなの。パソコンもないの。子供の目とせいせんに悪いというの。わたる君のこともママは、あたしのせいしんえいせいじょう、とっても悪いからこれ以上は見てはだめというの」

「そうかあ」

しばらくおじさんはあたしの顔を見て何かを考えているようだった。

「わたる君が亡くなったのは9月1日だよ。始業式がはじまる前の時間だ。知らなかったのかね」

「はい」

「加絵ちゃん、あのなあ・・・、太田はいや、太田先生はわたる君を殺してはいないというんだよ」

「・・・はあ」

「前に何度か犯した、いやっ・・・いじめたのは認めたが殺してはいないと言いつ張っている」

「でも、」

「でも？」

「あたしが見たときわたる君の首に赤い筋がついていました」

「うんうん」

「それだけです」

「そうか。太田先生はわたる君をいじめるときに首を絞めるのは認めている。しかし始業式には2人だけで図書室で会ってはいないというのだ」

「9月1日に、ですか」

「だが、わたる君は9月1日に図書室に来ていた。鍵は開いていた。彼は入って電気をつけて本を取り出した」

「・・・」

「加絵ちゃん、わたる君は普段から図書室に来ていたね。そして君も」

「あたしがいるときはよく見かけました」

「うん、君の方がよく図書室にいるんだ？」

「はい」

「わたる君は君に近寄る？」

「いいえ、いつも絵本を見ていたわ」

「絵本ねえ、」

「うん、いつも同じ絵本を見ていたわ」

「たとえば、どんな？」

「えびの本です」

「えび？図鑑みたいなの？どんな内容かわかる？」

「はい。生のえびがどこか外国の海から釣られてきて、日本に来て

魚屋さんやスーパーで売られてから、家でエビフライになるまでの  
お話の絵本です」

「おもしろいのかね」

「あたしも読んだけど、まあまあです。でもわたる君は気に入って  
いてよく読んでいました」

「わたる君の家の隣は魚屋さんだ。それでエビの本が好きになった  
のかもしれないね」

「そうかもしれません」

「いつもそのえびの本だったかね」

「あとオルゴールの本です」

「なにっ！」

いきなりおじさんが大声を出したのであたしはびっくりしました。

「いや、ごめんごめん。オルゴールの絵本だね」

「いいえ、開けるとオルゴールみたいな電子音が聞こえる本です。  
うるさいからあたしは迷惑でしたけど」

「そんな本が図書室に置いてあるのは変だね。わたる君が家から持  
ってきていたかな」

「わたる君はいつも手ぶらで学校にくるよ。ランドセルはしよって  
いても空っぽ。あたしは前に同じクラスだったので知ってるよ」

「うーん、オルゴールの本、ねえ。どんな曲かな」

「知らない。でもいるも同じ曲でした」

「ねえ、加絵ちゃん。あの時にオルゴールの曲が聞こえたかなあ。  
聞こえなかったかなあ」

「・・・」

あの時っていつの話のことでしょうか？あたしにはおじさんの考え  
ていることがさっぱりわかりませんでした。ぼそぼそという話声が  
聞こえますがあたしには内容がわかりません。耳が悪いからです。  
でもまた耳が悪いからとか言われるのももう嫌です。

「おじさん、あたしねえ、」

「うん、なんでも言っただらァン」

「オルゴールの音、聞いたよ」

「そうか、どんな曲だった？」

あたしはあの耳障りな電子音楽のメロディーを口ずさみました。

おじさんはあたしの顔をじつと見ました。

「・・・聞いたことのない曲だねえ」

それからあたしは家に帰されました。廊下ですつと待たされていたママはしつこくどんなことを聞かれたのか質問しますが頭が痛いから、と言ってあたしは寝たふりをしました。あたしは耳が悪いのであの時オルゴールの音なんか聞こえなかったけれど聞こえたことにしました。

おじさんにはうそをついたことになりませんが、平気です。耳が悪いといわれるのでウソをつくことになったのだから。「りょうしんのかしゃく」なんか感じませんでした。わたる君はオルゴールの本を読んでいたときに太田先生にいじめられたのです。きっと。

だって夢の中でもわたる君はオルゴールを聞いていたから間違いないでしょう？

## 第16話

次の日は学校へ行きました。校門までママがついてきました。あたしはちゃんと行くからといったのにママは全然信用してくれませんでした。職員室までついてこられました。それから塚本先生の変わりになった臨時の先生に会いました。多田先生と比べてめがねをかけた肥ったおばさんでした。隣に詠子先生もいました。

「桜田さん、大変だったね」

とあたしをねぎらってくれました。詠子先生と多田先生はついてきたママにもきちんといさつしていました。校長先生も奥から出てきてママにあいさつしました。だからママは満足そうでした。

「この子はいろいろあったけれども大丈夫でしょう。勉強の遅れだけは気になりますのでよろしくお願いします」

ママはこういって帰ったのであたしはせいせいしました。

ママは行った後多田先生は「桜田さん、先に教室へ行っていてね」と言いました。声が大きくてはきはきとした先生でした。詠子先生が「桜田さん、途中まで一緒に行きましょうか」と言ってくれたのであたし達は廊下に出ました。

塚本先生も太田先生ももうこの学校にはいません。あたしはうれしかったです。わたる君にはかわいそうですが、あたしはうきうきしました。3年生になってからこんなに良い気分になったのは初めてではないでしょうか。

詠子先生と二人きりになれたのはじめてです。2年生の時にだつてありませんでした。あたしはともうれしかったです。詠子先生はあたしにはやさしいし、きれいだし、いつもにこにこしていて大好きです。

詠子先生は歩きながら校長先生ももしかしたら新しい校長先生になるかもしれないことを言いました。

そしてあの階段につきましました。階段で立ち止って詠子先生が言い

ました。

「・・・ねえ桜田さん。わたる君は本当に太田先生に殺されたと思う？」

「わかりません」

「警察にお話ししたのでしよう」

「先生、どうして知っているの」

「わたしはわたる君の担任だからちよつと知っているのよ」

「ふーん」

「あ、桜田さん、図書室へ行ってみない？」

あたしは詠子先生の顔を見上げます。詠子先生の顔は青白かったです。せつかくの詠子先生の誘いでしたが嫌でした。

「あそこはわたる君が死んだところでしよう」

「ええ、でも警察の人ももういないし」

詠子先生はそう言つてさつさと図書室の方へ歩きました。先を行つてあたしを振り返るのであたしも仕方なしに詠子先生について行きました。詠子先生は図書室に入りスイッチを押して電気をつけません。カーテンは閉まつたままで外が見えません。真ん中にあつた大きな机といすはあとかたもなく部屋はがらんとしていました。

この部屋の中でわたる君は死んでいたのです。あたしは君が悪くて詠子先生の後ろに立っていました。

「ここはまだ立ち入り禁止になつているの。だから内緒ね。桜田さん悪いけれど、まだ朝の1時間目に時間があるし、ここにいてね」

詠子先生の様子はなんだか変でした。いつものやさしい笑顔ではありません。せつかく二人きりになれたのに全然うれしくありませんでした。でも詠子先生はあたしを教室へ行かせてくれません。そしてわたる君が死んでしまったことを何度も言います。そして太田先生がわたる君にしたことはすごく悪いことだしけいべつもしているが、殺すまではできないはずだと言います。

「・・・新聞でも犯行を否認しているらしいし、新聞、見てる？」

あたしは首をふります。ここにいるというだけでなんだか息苦し

いです。もうあたしはこの図書室へ本を読みに行くことはないでしょう。気持ちが悪い。気分が悪い。教室も嫌だし、長い昼休みにあたしはどこへ行って時間をつぶしたらいいのだろうか。

詠子先生は続けて質問します。

「夏休みはここもプールも自由に仕えたので私は浮浪者が入り込んだかもしれないと思うの」

あたしは返事をしませんでした。答えようがなかったです。ただふと思いついて例のえびの絵本とオルゴールの本をさがしました。わたる君はいつも同じ場所に本を置き、同じ場所に本を戻していましたから。

えびの絵本はすぐに見つかりました。でもオルゴールの本はなかった。で何となくほっとしました。あたしはもうあの音楽を聞かなくてもいいのですから。

「・・・桜田さん、どうしたの」

「オルゴールの本がないの」

「オルゴールの本？」

「わたる君がいつも見て聞いていた本です」

「どんな大きさだった」

詠子先生もさがそうとしました。さがさなくてもいいのに。結局見つからなくてほっとしました。

「変ねえ、わたる君、家に持って帰ったのかしら」

「わたる君のランドセルはいつもからっぽだったよ」

「ええ、それは先生も知っています」

詠子先生は何か考えています。

「私ね、わたる君が図書室にいつもいることは知らなかったの。桜田さんは昔から本は好きだったわね、図書室へはよく来ていたの？」

「3年生になつてからです」

3年生になつてから・・・、あたしはこの意味を詠子先生にわかってほしいと思いました。けれどわかつてもらえないです。先生も知らん顔です。

「そう・・・でもオルゴールの本なんて普通図書室に置かしたら」

「わたる君が家からもってきたのかもしれない」

詠子先生は「かわいそうに」とつぶやきました。あたしの顔を見て言いました。

「わたる君が私の夢の中で泣いているの、かわいそうに、どうしたらいいのかしらね」

あたしも驚いて言いました。

「詠子先生、わたる君は泣いているだけでしょう、でも変なオルゴールの音楽も聞こえるでしょ」

詠子先生の目が大きく丸くなりました。

「桜田さん？」

「あたしの夢の中にもわたる君が出てくるの、困ってるの」

「まあ・・・オルゴールまでは先生には聞こえなかったけれど・・・いきなりチャイムの音が鳴ってあたしと詠子先生は飛び上がるほどびっくりしました。」

「大変、授業を始めなければ！すぐに教室へ行きましょう」

あたしと詠子先生は図書室を出て走り出しました。

## 第17話

塚本先生のかわりになった多田先生はあたしをいじめたりしませんでした。それはよくわかります。あたしのママが今までのことをしゃべったから。

「桜田さんは授業に遅れ気味だから居残りで教えましょうね」と言ってくれました。あたしはもう勉強が嫌いになっていましたからちよつと迷惑でしたがいい先生なのでしょう、多分。

大木くんはあたしを見るなり「やあ、ひさしぶりだったね。自動車に轢かれて死ななくてよかったなあ」と言いました。みんなもあたしの頭に巻いている包帯を見て気を使ってくれました。よくいじめる子も何も言いませんでした。

あたしはこのままいじめもなくなるなら、学校にいるのも悪くないと思いました。授業をさぼったせいで自動車に轢かれたと言われたらどうしようかと思っていましたが誰も言いませんでした。また詠子先生もわたる君の夢を見ていたことであたしを心強くしてくれました。あたしは晴れ晴れとした気分で教科書を開いて授業を聞きました。

長い昼休みがきました。騒がしかったのですが教室で本を読んでいます。豊成さんが何か話したそうにしていますが、あたしは顔も見ませんでした。

塚本先生のあたしに対するいじめに、少しでも加担した人は許せない気分でした。

それにしても頭がまだ痛いです。耳もひゅーひゅーいのはあいかかわらずです。補聴器なんか放り出したいです。あたしはうるさい教室を1人出ました。午後の授業まであと20分もあります。

自然とあの図書室へ向かってしまいます。もう来ることはないと思っていた場所ですが、あたしには居場所がありません。図書室のドアをそつと開けます。誰もいません。明るい太陽の光がはいつて

きているというのに、机もイスもない図書室は何か不気味でした。

「・・・やっぱり帰ろうかな」

引き返そうとしたとき「あれ、加絵ちゃんかな？」という声がありました。驚いて振り返ると例のおじさんです。警察の、刑事のおじさん・・・。詠子先生もいます。2人とも分厚い帳簿みたいなものを持っていました。あたしがこの図書室に入ったときには2人はいたのです。なんで黙っていてあたしが出ていくときに声をかけたのでしょうか？2人で隠れていたのかしら・・・？なんだかとても不安になってきました。

「私達はね、絵本を探しにきたんだよ」

「・・・」

詠子先生が立ったまま、帳簿をばらばらとめくっていました。

「やっぱり開けると電子音がするオルゴールの本らしきものは購入した記録はありませんよ」

「ふうん」

これはおじさんの声です。おじさんはあたしを手招きしてえびの本を見せました。

「この本だね、ねえ、加絵ちゃん」

「はい、わたる君が好きだった本です」

「うん、うん」

あたしはこれ以上ここにいたくありませんでした。もう図書室から逃げ出したい。

おじさんは携帯電話で誰かと話します。

「・・・オルゴールの本がわたる君の家にないか確認してくれ。葬式にくばった新しいやつではないぞ。被害者が元から持っていたやつだぞ」

その瞬間、あたしはあの本はおばさんが持っていたことを思い出しました。どうして忘れてしまったのでしょうか。おばさんはあのオルゴールの本をあたしにくれようとしていたのに。そうしたら、そ

うしたら・・・。

いいえ、あれは、あの本はお葬式に来てくれた子にあげたとか言  
ってなかった・・・？ああ。どうだったか忘れてしまった・・・。

あたしは自分が何を考えているのかわかりません。おばさんの悲  
しそうな目とわたる君の泣き声がどこからかせまっています。

あたしはうめき、頭をかかえてしゃがみこみました。

「・・・ああ、頭が痛い、耳も痛い」

「桜田さん？」

「加絵ちゃん！」

詠子先生とおじさんが近寄ってきます。図書室の外の廊下で何人  
かの生徒がいつのまにかこちらの様子をうかがっています。その中  
の一人にわたる君にとても似ている男の子がいます。いいえ、あれ  
はわたる君・・・？

あたしは悲鳴をあげました。

「痛い、痛い！」

「大変だわ」

「この子は自動車事故にあって怪我をしている。早く救急車を呼ば  
う」

あたしは大人たちの騒いでいる様子を顔を手で覆いながら冷静に  
見えています。頭や耳が痛いのは本当でずきずきいっています。でも一  
方で本当は痛くない、と心の中のどこかで自分がいっています。い  
え、やっぱりすごく痛いです。やっぱり我慢できません。

他の先生や多田先生もきました。みんな心配そうでした。あたし  
はこれほど人から心配されたことはありません。あたしはうめきな  
がらもちよつとした満足感を感じました。人々の声が補聴器で増幅  
されてグオングオンと反響します。これはちよつと不快です。取り  
出してしまいたいけどママに怒られるのでやめておきます。やがて  
白い服を着た救急隊員の人々が来ました。

「さあ、これに乗って」

白い担架です。あたしは救急の人に抱っこされて担架に乗ろうとしました。が、いつのまにか短歌には誰かが寝ています。

それはあのわたる君でした。わたる君が目をつぶって横たわっています。

「あつ、あの子に乗っている。これわたる君が使った担架だ」

「だいじょうぶ、だいじょうぶ。誰もいやしないよ」

「いや、いや！」

おじさんの腕がさつとあたしを抱きとめました。

「加絵ちゃん、だいじょうぶだから。おじさんが抱っこして車まで連れて行ってあげよう。それならいいだろう？」

あたしはおじさんに抱っこされました。おじさんの服から煙草のにおいがします。あたしはうんと深呼吸しました。

「・・・加絵ちゃん？」

「はい」

「頭はもう痛くないかね？」

あたしははつとしました。おじさんと目があいました。

「・・・ちよつと痛いです」

「病院は行くだろう？」

「はい」

おじさんの肩越しに詠子先生と目があいました。まわりの大人や生徒たちが廊下からあたし達を見守っています。目の端にまだあのわたる君がいました。今度は担架ではなく、あたしのすぐ横に立っていました。そしてこつちを見えています。わたる君の目がやたらと大きく見えました。

「・・・！！」

この時あたしは自分で何を叫んだのか覚えていません。どうやって病院に運ばれたのかも知りません。

わたる君はあのオルゴールの音とともにあたしの横に座っています。あたしは今、本に夢中なのに。何という本か忘れましたがとて

もいいところを読んでいきます。でもこの耳障りな音がすると本に集中できません。いつもよりすごく大きく聞こえます。困ります。補聴器をはずそうかと思いましたがママにしかられるから嫌です。だからあたしはわたる君に言いました。

「ねえ、この音なんかならない？うるさいよ」

わたる君はじっとしていてオルゴールを聞いています。

「しゃべれないの？これ貸してごらん」

あたしはオルゴールの本を取り上げてばたと閉じました。

「始業式がこれからはじまるのに、朝からそんな音あたしは聞きたくないのよ」

わたる君は怒って返せというようなくぐもった声を出しました。

だからあたしは言ってやりました。

「あたしの言うことが聞けないなら、また太田先生に首を絞められるよ！」

わたる君は泣きだしました。そして泣きながらあたしをつかもうとしました。よけましたが新しいブルーのお洋服のフリルをつかまれてぐしゃぐしゃにされてしまいました。

「あつ、わたる君。ひどいじゃないの。ママにしかられるじゃないの」

わたる君はフリルをつかんだまま、あたしをゆさぶります。あたしはかっとなつて思い切りわたる君を突き飛ばしました。

わたる君は図書室の大きなテーブルの角に頭が当たって変な声を出しました。そしてそれきり動かなくなりました。

あたしは怖くなって図書室を後ろも見ずに飛び出します。手に持ったままのオルゴールの本からあの耳障りな音が出てきました。あたしは廊下の窓から本を放り投げました。本は、あの本は……！

どこからか、わたる君の泣き声がします。いつまでも、いつまでも。

いつまでも……！

## 第18話（最終話）

目が覚めるとあたしは1人部屋に入って寝ていました。ここはまた病院のようです。おじさんが入ってきました。

「加絵ちゃん、目がさめたかね？」

「はい」

「ここはどこかわかるね」

「はい、病院です」

「そうだよ」

おじさんの目は悲しそうでした。あたしを心配してくれるのです。この人は本当にいい人です。

「どうしてここに運ばれてきたのか、わかるかい」

「頭が痛くなったからです」

「どうして頭が痛くなったのかな」

「自動車の轢かれそうになったからです」

「・・・、もう痛くないかな」

あたしはちよつと考えました。もう痛みはありません。でも痛いことにしておいた方がいいような気がします。だってみんなが心配してくれるし、救急車に乗って行ったのだし。

「・・・少しましになったけれど、まだ痛いです」

「耳は？」

あたしは耳に手をあけました。補聴器が知らない間にはずされていました。それである耳障りなヒューヒューと言う音が聞こえなかったのです。

「少しましです」

「補聴器いらなかい？」

「おじさんの声は大きいからよく聞こえるの」

「そうかそうか」

おじさんははじめて微笑みました。

「ママは？」

「ママは廊下にいるよ。会いたいかな？」

「うーん、別にいいよ。補聴器つけてないからまた怒るし」

「そうか、ところで加絵ちゃん、君は、始業式の日……」

「えっ」

「始業式……」

「なあに、おじさん」

「聞こえないかね」

あたしは正直に言う。このおじさんなら何を言っても笑わないだろう。こんなにやさしいおじさんだから。

「始業式のあとが聞こえませんでした。もう1回言ってください」

おじさんはあたしの顔にかぶさるようにして何かを聞きました。

何かを聞いたのはわかりましたが内容まではわかりません。あたしは首をふります。おじさんはあたしの顔をじっと見つめたままです。あたしは不安になりました。

「じゃあ、君の名前を言えるかな」

「桜田加絵、です」

「よしよし、じゃあわたる君は知っているね」

「はい」

おじさんはほっとしたようです。

「あの始業式の日、君は図書室に……」

「あ、また。あとの言葉が聞こえませんでした。もう1回言ってください」

おじさんの顔がまた曇りました。あたしはもっと不安になって頭が本当に痛んできました。

「ねえ、どうしたの。おじさん？」

おじさんはあたしの頭をなでました。そうされると頭痛が楽になつてきます。

「ねえ、おじさん、あたしは夢を見るの」

「夢？」

「詠子先生も見たと言っていた」

「どんな夢かなあ」

「わたる君が泣いているだけの夢」

「・・・」

あたしは話を続けた。このおじさんだけだ。おじさんはあたしの言う言葉を聞きもらずまいと真剣な顔をしてあたしを見てくれる。

あたしの話聞いてくれる。

ああ、いいなあ。

このおじさんがあたしのお父さんだったらなあ。このおじさんの子供がうらやましいなあ。あたしは夢の話をする。

「わたる君は泣いているだけだよ。あたしの夢にはオルゴールの音がどこからか出てくるの。けれど詠子先生の夢には音なんか聞こえないって。詠子先生にも聞いてみて」

「ああ、聞いてみよう」

「加絵ちゃん、この病院にはどうやって来たか覚えているかなあ」

「うう、おじさんと詠子先生がいたのは覚えている」

「それはどこだった？」

「図書室です」

「それから、」

「・・・何か夢を見ていた様な気がします」

あたしはその夢を思い出そうとしました。でも思い出せません。どうしてだろう。

「ああおじさん。さっきわたる君があたしの夢の中に出てきたの。何かあったようだけど、だめ。どうしてもあたしには思い出せないの」

「そうか、でもその夢の場所も図書室だったかな」

「ええ、多分そうだと思います」

「そうか。わたる君のことは今でも好きかね」

「はい、いい子だったと思います」

「わたる君が死んでどう思う？彼はもう図書室へは来れないだろう」

「はい、かわいいそうです。もう会えないと思うと残念です」

「犯人が憎い？」

「はい」

「本当にそう思う？」

「はい。わたる君、太田先生に殺されて本当にかわいそう！」

おじさんはしばらく黙っていました。そして首をふりました。

「太田先生はアリバイが立証された。いじめたのは本当だからまだ警察にいて取り調べを受けている。でも彼はわたる君を殺してはいなかった」

「太田先生はわたる君を殺していなかったの!？」

「ああ」

「じゃあ、どうやって犯人を見つけるの？」

「図書室にあった指紋は太田先生や一部の先生を除けば子供のものしかなかった」

「じゃあ、犯人がわからなかったら、わたる君かわいそうだね。ずっと夢の中で泣いているだけになるね。本当にかわいそう・・・」

おじさんの手が止まった。あたしはどうしたのかと思っておじさんの顔を見る。

おじさんはあたしの頭をやさしく何度もなでてくれた。

何度も、何度も。

「ああ、かわいそうにね・・・」

まるでおじさんはあたしのことをかわいそうに、と言ってくれているかのようだった。あたしはうれしくなっていくりと微笑んだ。  
・・・頭痛はいつのまにか止まっている。

完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6707q/>

---

あたしのはなしをきいてくれるの？（仮題）

2011年3月21日17時25分発行